宮崎医大整形外科

同門会誌

創刊号

昭和63年1月

宮崎医科大学整形外科学教室同門会

宮崎医科大学整形外科学講座開講10周年記念祝賀会　昭和59年６月30日　　於 宮崎観光ホテル

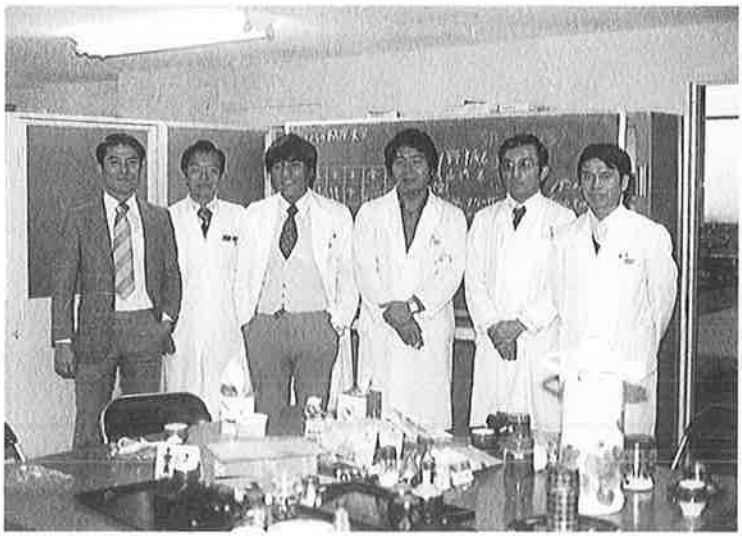
宮崎医科大学整形外科同門会　昭和62年５月30日　於 宮崎厚生年金会館

第十四回日本リウマチ・関節外科学会での
木村　千仭会長挨拶
（昭和61年10月24日）

第14回日本リウマチ・関節外科学会懇親会　　（昭和61年10月23日）

第14回日本リウマチ
関節外科学会で挨拶
される
　玉井達二前学長
（昭和61年10月24日）

環暦祝で
　花束を受ける
　　木村千仪教授
（昭和62年２月10日）



宮医大整形外科
教室一同
（病院開院初期）
（昭和53年）

整形外科野球チームの
勇姿（結成２年目）
（昭和56年８月 米子にて）

医局旅行
霧島登山での
想　い　出
（昭和60年７月14日）

いこいのひととき
（クリスマスパーティ）
忘年会での
明るい笑顔
（昭和60年12月）

あ　い　さ　つ

会長　木村千仭

昭和４９年に本学が創設され、５１年秋に開院されてぼつぼつ医局員が集まり、同門会を作ろうと言う話がでたのは５３年頃であったと思います。そのうちに同門会誌でも作りたいと考えてはいたものの、忙しさにかこつけてついつい延びてしまい、やっとみ腰をあげはじめたのがそれから１０年という“緩慢的劫作”であります。１３年前、無医大県解消と地域医療の向上を目的とし、医道、医学、医術を３本柱として建立された本学も、整形外科としての同門会員がやっと５０名をかぞえ、大学内・公的病院、開業などそれぞれの立場で貢献していると信じています。

今後さらに会員間の融和と交流の上に、医学の研鑽を進めて、会員が増し、同門会が大きく成長することを願って止まない次第です。

特別寄稿

同門会誌の創刊によせて（よい思い出を！）

宮崎医科大学前学長　　玉　井　達　二

同門会誌の発刊を心からお慶び致します。

私にも皆さんと同じように、生れてから今日まで、多くの人々との出会いがありました。

西も東も判らなかった少年時代、学生時代、海軍の軍医時代、新潟医大の整形外科の時代、熊本大学時代、そして宮崎医大での時代など数え上げると限りがありません。

その出合いが、たのしい思い出をつくったこともあり、或る時には悲しい思い出につながり、或る時はただひと時の出合いであったこともありました。しかしある出合いは、その人、その人々との理解を深め、生涯の交友を生んでくれました。

これら多くの出会いは、良い場合でも、悪い場合でも、それぞれ私に何かを教えてくれました。本当に有難い事と思っております。

人と人との間には、出合いを通して、「同じ思い出」が生れ、それが絆となって心が結ばれます。そしてその「思い出」が「よい思い出」であればあるほど、又多ければ多いほど、その絆は強く好ましいものになると思っております。

私共は特に変った人でなければ、心の通った友なしでは、生活して行くことは出来ません。したがってこのような良い友を持つためには、「よい思い出」を持つような努力と、それに似合った心くばりが必要であり、そのよい心くばりによってこそ、美しい又色々な形をした、友情の花が咲き、実を結ぶものと思います。

このことは私共の、一人と一人の間だけでなく、私共が集ってつくる組織でも同じであると思います。特に同じ目的をもっている人々によって形づくられている教室では、なおさらであると考えます。即ち、教室では「よい同じ思い出」を澤山もつことが大切であると思っておりますが、如何でしょうか。

現在教室の皆さんが力を合わせて、立派な学生を育て上げておられる事、価値ある研究をしておられる事、又病のために皆さんの診療科に救いを求めて来られた患者さんを、立派に社会へ復帰させてあげる事、すべてが「よい思い出」となっていると思います。又レクリエーションの旅行、スポーツ、或いは忘年会なども、たのしいよい思い出をつくってくれ、皆さんの大きな心の絆となっていると考えます。

それに加えて、この度同門会誌が発刊されるとお聞きして、この同門会誌が皆さんの「よい思い出」となって、同門の方々の心の絆を更に更に大きく強い絆に育て上げ、木村教授、田島助教授を中心とした現在の立派な教室が、益々発展し揺ぎないものとなり、大きく飛躍されますことを確信しております。

最後に皆さんの御健康で飛躍されることをお祈りし、重ねて同門会誌の発刊を心からお慶び致します。

整形外科同門会誌によせて

田　島　直　也

宮崎医科大学は開学が昭和４９年、同付属病院が昭和５２年であり、それぞれに１０年以上経過し、整形外科開講後１２年になった。

１０年を期し、同門会誌創刊計画が持ち上がったが、昨年は第１４回日本リウマチ・関節外科学会を開催したこともあり、つい、のびのびになり今日になってしまった。

この間、開学に御尽力された玉井達二名誉教授も、副学長、病院長を約７年、学長を二期六年間つとめられ、昨年春から熊本にお帰りになられている。木村教授もこの１月で教授就任１０年になられる。

ここで新設医大としての宮崎医大をふりかえってみる。

１）　教室員、同門会員について

宮崎医大の教室員、同門会員の特徴として先づ出身大学の多様性があげられる。現在同門会員は５１名であるが、出身大学は１６大学にわたる。最近は本学出身者が増えつつあるが、現在の教室員は教授以下教官１０名だけでも出身大学数は６である。これは数年～１０数年、他大学で研究、診療経験がある人が入ってくる場合もあり宮崎医大としての研究、治療の方針の決定には強いリーダーシップが要求される。しかし開講５年迄の入局者１１名中、既に関連外病院又は開業した人は８名であり当初入局の人はショートリリーフ的役割りが強かったともいえる。いずれにしろ、今後大学がいかに発展するかいなかが問題でありいよいよ正念場である。

２）　関連病院について

どこの新設医大も関連病院には苦労している。大学の教官、医員、医員（研修医）の定数がある以上、当然大学だけでは行きづまりになる。入局数を始めから制限している新設医大もある。

一般的に県内の有数の国公立病院は既に他大学の傘下に入っていて、よほどの事情か政治力がないと普通新設医大は割り込みにくい。

又自治医大出身者は少しずつではあるが県内公立病院に入り、その目的をはたしつつあり、又開業の方もベッド規制があり、新たに開設は困難である。こうなると関連病院獲得はよほど一生懸命やらないと医師過剰の影響をまともに新設医大がかぶる事になる。既設の大学も一般病院は地元の大学に少しずつ、ゆずってほしいものである。

交通網が発達した現在は数県を対象とした整形外科専門病院のセンターと附属研究施設を国が国立病院統廃合問題の前に考えてほしいと思う。

医　局　長　雑　感

川　野　桂一郎

昨年夏より、武内先生の後任として、医局長を命ぜられました。非力ながら、全力をつくしてその任にあたるべく努力を致しておりますが、十分に役を果していないのが現状であります。振り返えれば、我校は、新設医大という事もあり、特別に医局長職をもうけずにやって来ましたが、医局の創設期にあっては、伊勢、矢野先生がその任にあられ、大変苦労をされたとお聞きしています。その後、田島助教授と山口先生と同時に着任された渡辺先生が引き継がれ、そのおおらかな性格でもって、学問の面ではもちろんの事、厚生面でも、ゴルフや野球を通じ、医局員のチームワーク作りに努力されました。次の岡田先生の期間には、関連病院も増加し、中でも、麻酔の研修が、大学に加え、熊本市民病院麻酔科にても受けられる様になった事は、研修医の間で好評を得ています。前医局長の武内先生は、４年余りに渡り任を務められ、その間、開講１０周年、日本リュウマチ関節外科学会等の大きな行事にタッチされました。こうした先輩諸先生方の努力が、現医局の土台となり骨格をつくっていると思います。現在の医局員数は３２名、関連病院は、９施設を数えます。大学においては、グループ診療が行なわれ、木村教授指導の下での武内先生をチーフとした　ＲＡ下肢班、田島助教授指導での脊椎班、長鶴先生をチーフとした股関節班、山口先生をチーフとした上肢班に分かれてそれぞれ専門的診療がなされています。リサーチの面でも、実験的関節炎、重回帰分析を用いての評価法、歩行分析、椎間板の生化学的研究等が行われています。

少々、手前味噌かもしれませんが、私自身、医局が、充実期に入りつつある感を抱いています。今後、ますます木村整形が発展し、伝承されてゆかん事を切に祈るとともに、微力ながら、少しでもそのお手伝いができればと願う今日この頃であります。

目　　次

あいさつ　会　長　木村　千仭

特別寄稿

同門会誌の創刊によせて　宮崎医科大学前学長　玉井　達二

整形外科同門会誌によせて　田島　直也

医局長雑感　川野桂一郎

随　　想

卒後研修の思いで　宮崎医科大学整形外科教授　木村　千仭 …… 1

英国関節鏡セミナーに参加して　栄　四男 …… 3

失ったものを取り戻す年へ　押川紘一郎 …… 4

股関節班の展望　長鶴　義隆 …… 5

感　謝　山口　一郎 …… 5

宮崎医科大学整形外科の歴史　武内　晴明，脇山　尚登 …… 6

研修医の頃　平川　俊一 …… 9

医局旅行　戸田　勝 …… 10

フィクション第２５回西日本野球大会　松本　宏一 …… 12

車椅子バスケットボールティーム“サンライズ”と私　田島　直也 …… 12

病院紹介

国立療養所宮崎病院 …… 14

宮崎済生会日向病院 …… 15

公立多良木病院 …… 16

宮崎県立こども療育センター …… 17

宮崎市郡医師会立医師会病院 …… 18

研修医自己紹介 …… 19

教室同門の研究業績 …… 23

外来・入院患者の推移及び手術件数 …… 61

同門会名簿 …… 62

賛助会員名簿 …… 74

編集後記 …… 76

随　想

卒後研修の思い出

宮崎医科大学整形外科教授
木　村　千　仭

昔のインターン制度は医学部卒業後、給与なしで一年間の期間内に各科をまわる研修を義務づけたもので、終了後国家試験を行ってはじめて医師免許証が与えられるものである。このインターン期間に、たとえ表面的にせよ臨床・予防の全般をみるのは、医師として将来いずれの分野に向うとしても大いに役立つもので、その比重は実習内容の如何にかかるものであった。私の経験からすると、以前のインターン制度と昭和40年代初めの大学紛争後の自主ローテート、臨床研修制度などを比べた場合、実習そのものの在り方は前者の方が良かったのではないかと思っている。ただし次の問題点さえなかったならばという前提のもとでの話である。

問題点の第一は無給であったことで、殆どのインターン生が、その不合理に対して行政側へ不満を持っていたことは事実である。第二は、大学附属病院や国立病院など当然インターン生の指導能力を備えていると思われる厚生省の指定病院の多くで、学生でもなく医師でもない中途半端な存在の実地修練生（インターン）をメディカルスタッフ達がうとましく時には邪魔者扱いにしていたことも事実である。第三の問題点は、インターン生を病院経営の合理化に使っていた所があるということである。すなわちインターン生を臨床医学実地修練生でなく、病院の人手不足をカバーするものとして看護婦・検査員の無給代理を務めさせる傾向のある病院も少なからずあったということである。

こうした矛盾が高じて、学園紛争の一因となったことも事実である。これらの問題点が解決されたインターン制度なら、残しておいた方が良かったのではないかと考える。私は昭和29年春、医学部を出てインターン指定病院を決めるとき、人並みに前述の三つの問題点が出来るだけ少ない病院を探し、長崎の三菱系の病院でインターン生活を送ったが、色々と勉強になったことを今でも感謝している。例えば待遇の面では、病院と離れた山頂の診療所がインターン生の宿舎で、交替で往診当直をやり、食事はかなりまずかったが、病院で食事が与えられたし、額は覚えていないが当時月額何千円かの手当を貰ったので、最低生活は維持できた。実習面では、一ヵ月ないし三ヵ月の単位で各科をローテートしたが、もともと外科系をめざしていた私にとっては、こうした第一線病院では見ること聞くことすべてが興味あるものばかりで、特に各科のobenが親切な上、メディカルスタッフとの間がat homeの雰囲気の中での生活だったので、充実した勉強が出来たと思っている。

例えば外科実習では当時各種の疼痛性疾患に対してブドウ糖+VB_1の動注療法が盛んであったので、毎日のように動注していると結構上手くなったし、麻酔科がなかった当時は外科医が自ら麻酔を施す必要があり、腰椎麻酔はかなり自信が持てるようになった。40例程開腹手術で鈎引きをさせて貰って、あとで7例Appendectomyをさせて貰い感激したのを覚えている。幸い経過が良かったので幸運といえよう。落盤事故で坑内から次々と運びこまれる負傷者の救命処置に、無我夢中で走り回ったり、当直のとき、入れ墨の男が切断した小指をぶら下げて、何とかしろとどなられて、切れた指より此方の顔の方が蒼白になっていたと

看護婦から冷やかされたり、息つく間もない程の忙しさがその後、整形外科をやるようになったとき、大学病院でインターンをしていた同級生より実際面で優越感を持てたことも事実であり、学外に外勤したときに非常に役に立った。

小児科で実用的であった実習といえば、外来処置室での静注を連日鍛えられた点である。ベテランのナースから日赤方式はこうだ、国立病院ではこうだと講釈をうけながら、静注にも術式がわかれているのかと頭を捻りながらの努力である。これも毎日やっているうちに少しずつ上手になり、入局してからの麻酔時やpoor risk時の静注、また動物実験での静注には大いに助かったと喜んでいる。

産婦人科での実習は大して記憶に留まるような思い出はなかったが、ある夜半、副直で病院に泊まっていて、突然助産婦からの連絡であと産がでないから直に産室へ！とのことである。Gyne先生は出張中、当直は耳鼻科の先生で私に行けとのこと。かけつけたら出産第三期の遷延である。赤ん坊は無事に生まれたが臍帯が繋がったままで、胎盤のゆ着か嵌頓かわらないが、先ずどうしたらよいかに迷った。すると側の助産婦に「先生！急いで手を洗って！」と叫ばれ、しぶしぶ手洗いしてゴム手袋をはめながら、産科の講義を思い浮かべ、用手剝離の言葉だけを頼りに、恐る恐る指を一本、二本と膣内へ入れ、足はガタガタふるえている。とまた「先生！手を一本入れなきゃダメ！」とどなられ、臍帯を辿りながら生暖い子宮内へ右手を突っ込み、内壁をまさぐっているうちに胎盤の一部が内壁から外れた。シメタ！とばかり、そこから静かに剝がしたのであるが何とヌルヌルして気持ちの悪いこと。でも無事に体外に胎盤を取り出したときは、余りの緊張と安堵感でこちらがぐったりしてしまった。あれ以来、女性の性器内に手を突っ込むなんてことはないし、一生の思い出となった。

もう一つ現在ではまず経験できないインターン時代の嫌な思い出は、公衆衛生（保健所）実習での検診である。昭和29年といえば、未だ遊郭や赤線などが法的に認められていた時代で、遊女達は毎月定期的に保健所の指定する病院で性病の検査を受ける義務があり、有病者は一定期間営業停止を命ぜられた。私も保健所実習で、この検査をやらされることになった。検査日には、病院の廊下に彼女らが列を作っており、白い眼で私達をにらみつけている。診察室に入るとすでに三人程検診台にのって待っている。そこで一人ずつ膣鈎で局所を開き、白金耳でスメアをデッキグラスに塗り、染色してGono coccusの有無を調べて記載する訳である。問題は膣鈎の使い方であり、カーテンの向こうから、「痛いよッ！アンタはインターンだろう？」と叱られる始末である。こんな嫌なものを見つめて生活するのはご免だ！とばかりに産婦人科への入局は止めた次第である。しかし、検診が強制されていない現代は、はたして安全だろうか？もっと恐ろしいエイズ旋風が荒れ狂っている現在も複雑な世相である。

インターン時代でとくに印象が強かったことだけを二、三あげてみたが、その他諸々のこうした経験は、後の医師としての生活に大いに役立ったことは事実である。当時の大学附属病院や国立病院では得られなかったかも知れない幾つかの体験であったが、いまでも施設によっては似たような研修が出来るかもしれない。

昭和42年、43年の学園紛争を契機として、インターン制がなくなり、非入局研修（自主ローテート）、ストレート研修、ローテート研修と色々な形態で医師免許を持った若い人達がそれぞれに努力しているが、はたしてどんな研修方法が最大公約数的に良いとされるのか、今一つ判然としない点もある。また、たとえローテート研修のシステムであったとしても、それは道具であって運用の如何は教える側と受ける側の共同作業にかかっているのではなかろうか？。

英国関節鏡セミナーに参加して

栄　四男

私は、昨年9月ＡＡＮＡ(Arthroscopy Association of North America)主催の関節鏡セミナーに参加し、その後 Hughston Sports Medicine Hospitalを見学する機会がありましたので、1年前のことで少々古くなりましたが、アメリカで見た関節鏡の状況を報告させていただきます。セミナーは、1986年9月14日から17日まで、Georgia州Atlanta郊外のリゾート地でひらかれ、参加者は150名前後で、日本からは、御一緒させてもらった貴島先生と私の2人だけでした。セミナーの内容ですが、肩、肘、手、膝、足の各関節の新鮮死体標本を使って、解剖と、鏡視下手術のデモが、隣室で行われ、その様子が会場のテレビに映され、参加者と、演者との間でマイクを通して討論すると言ったやり方で、見ているだけでよく理解できるようになっており、英語に全く弱い私は大変助かりました。

肩関節では、Rotator cuff tears, Labral tearsに対する鏡視下 Stapling, 不安定肩に対する鏡下手術が話題になっていました。

肘、手、足関節については、関節鏡の刺入点と、その解剖がくわして示され、これら小関節鏡のための基礎的な内容でした。

膝関節では、主題が半月板縫合と、ACL再建術で、 Patella tendon graft, Semitendinosus graft, Fascia lata 等のautograftを使った方法、死体からのallograftを使った方法が報告されましたが、人工靱帯の報告は全くありませんでした。テクニック的には、graftの錨着部位が、大腿骨、脛骨側ともisometric pointであるべきと強調されていました。半月板縫合は、meniscal stitcherを使った方法で行い、その適応範囲及び神経、血管に対する注意点は、すでに承知のことと同じでした。ACLと半月板損傷の合併例では、半月板縫合のみでは良くなく、同時にACL再建、又はaugmentationが必要とのことです。会場前には、各社の鏡視下手術器具が展示され、膝関節はもちろんのこと、肩、肘、手、足関節に対しても、さかんに関節鏡が行われているとの印象でした。

セミナー終了後、ColombusにあるHughston Sports Medicine Hospitalをたずねました。この病院は、Jack C. Hughstonが院長で、ここで関節鏡を精力的にやっているのが、James R. Andrewsです。我々は、数日彼の後について過ごしました。Dr Andrewsは朝7時から手術を行い、1日5〜6例をすませ、午後3時頃から9時頃まで外来診察で、米国各地からのプロ選手を含めたスポーツ選手を診ていました。この病院の医師は、小型テープレコーダーを持ち歩き、手術所見、外来診察所見をそれに吹きこみ、秘書がそれをカルテにタイプする方法をとっていました。肩の関節鏡は、健側を下にした側臥位になり、患側の腕を天井方向へ牽引した状態で、肩の前後方からアプローチしています。鏡視下滑膜切除が主で rotator cuff tear に対する stapling は、まだポピュラーではなさそうです。肘関節は、仰臥位で、患側腕を手術台より側方に伸ばし、肘を直角にまげて、天井方向へ引っぱり、内外側よりアプローチして、関節遊離体や、骨棘切除をやっていました。

膝関節では、急性損傷でmildからsevere、慢性損傷でmildからmoderateの不安定のある症例では、mini reconstructionと称する関節外再建術を行っていました。この方法は、腸脛靱帯を大

腿骨外顆部に tenodesis する方法で術後成績も良好とのことです。ACLの急性損傷に対して、関節切開して縫合するようなことは、全くやっていないようです。severe 以上の例には、patella tendon graft を使って、鏡視下に関節内再建術を行っています。これらの手術は、ビデオテープに録音され、後で本人及び家族への説明に使われていました。鏡視下手術は外来手術でやるのが普通のようでした。

以上10日あまりの短い旅行で知り得たことを報告しました。この機会を作ってくれた今給黎病院の皆さん、前田病院の貴島先生に感謝します。

失ったものを取り戻す年へ

押川整形外科
ペインクリニック
押川　紘一郎

西ドイツから東ドイツへ、通称チャーリーポイント国境検問所を、不安な思いで通過した。昭和62年８月24日、『東側』への旅の始まりであった。そこは、私が、今まで生きてきた世界とは、あきらかに、違ったものであった。すれちがう人々の、笑顔ですら、何か、とけこめない硬さを持ち、肌にそそぐ太陽の光や風にさえ、『西側』と違った、異質なものを感じた。しかし、石と乾燥した季候に守られたドイツ文明、ひいては、ヨーロッパ文明の重厚さには、これらの不快感を打ち消して、なお、余りあるほどのパワーがあった。確かに、街なみの商店には、わずかの品物しかなく、一流の専門店と思われる店内でさえ、高価な毛皮はあっても、品数は限られており、カメラの乾電池１本買い求めるにも、３つの都市のインターショップ（外貨のみの外国人専門店）を捜し回り、やっとの思いでみつけると、それも期限切れという始末であった。つまり、私が、今まで何不自由なく過ごしてきた日常生活の常識から完全に切り離されてしまった訳である。しかし驚いたことには、私の体自身は、旅の日数が重なっても、一向に、何の不満も訴えてこないのである。それどころか、日増しに食欲は増加し、深い眠りと快適なめざめの毎日となった。

テレビもラジオも、広告も、必要最小限の情報しか得られない中で、何も手を加えられていない、昔のままの石づくりのアパートや石畳に、伸びるだけ伸びた小枝さえ折られることのない、街角の大木など、数百年の歴史が、みごとに生活の中に溶けこんでいる。ここは、何ら、昔と変わらないものばかりなのだ。心地よい疲労感を感じつつ、東京へ戻った。成田空港から羽田空港へ向かう車の中で私は、とてつもなく大事な物を、日本は失いつつあるのではないか、いや、もうすでに失ってしまった、という思いにかられた。

今年は、１本の乾電池を捜して、歩き回った生活の中に、もう一度、自分をおいてみたいと思う。

昭和62年12月

股関節班の展望

長鶴義隆

当教室に赴任して4年の歳月が経ち、最近では入院待ちの患者も相当多くなり、その対策に苦慮している状態である。大学病院という特殊な状況下では、患者にとっても労多くして益なしといった誠に無意味な診療は許されず、適確な診断と適切な治療に基づく診療体制が要求されるのは当然のことであり、患者のそのような期待と信頼に対応できる診療および研究面においても我々医師に過大な責任と使命が課せられていることは衆知の事実であろう。

さて我々の診療班では、股関節の新生児検診をはじめ、OA、ペルテスおよび大腿骨頭壊死という三大股関節疾患に関する治療体系は、ほぼ確立されつつある中で、地道に症例を1例々々積み重ねながら、その体系の裏付けを最終目標にかかげ、今後更に邁進することこそ股関節班の重要な課題といえる。一つのことを全うし、更に独創性豊かに発展させるためには、賢人のいう“良き恩師の教えを①従、②守、③離”という精神の鉄則を守りながら、その過程を辿るしかないという。それぞれに要する期間は約10年単位といわれ、その長い年月に努力と忍耐と情熱を絶え間なく注ぐことこそ、その早道であろう。私も“従”から“守”にさしかかった位の所であろうか。まだまだ先きは長いような気がする。

幸いなことに、これまで学問的にも、また人間的にも良い環境のもとで最良の恩師に恵まれ教育されてきたお陰で、今日の自分があるように思える。いつの日か、恩師を一歩でも追い越せるような日がくれば、恩師への最高の恩返しでもあり、それが達成できるよう自分を鞭打ちながらこれからも努力していきたいものだと切望している。

感　謝

山口一郎

早いもので、この医局にお世話になりましてやがて8年が過ぎようとしています。同門の諸先生方には、いつも大変お世話になりまして本当に感謝申し上げます。

こちらへ参りました当時、私の家族は3人でしたがどうした弾みか現在6人になってしまいました。これもひとえに、長い別居生活を解消していただいた当整形外科教室のおかげとこれまた深く感謝いたしております。

人の一生は“重荷を背負って長い坂道を登るが如し”と言われております。私も全く同感で毎日四苦八苦しております。どうも苦を諦める前の所でうろうろしております。早く安寧を得たいと思うのですが煩悩具足の多い身の上、なかなかです。この過程を楽しむ境地が大切だと、どなたかに教えていただいた気もするのですが……。

これからも同門の諸先生方の御指導をお願いすることが多いかと存じますが、何卒宜しくお願い申し上げます。

宮崎医科大学整形外科の歴史（第一報）
－医局員の生存率について－

宮崎医科大学整形外科学教室
武　内　晴　明
脇　山　尚　登

Key words
宮崎医科大学
整形外科
医局
生存率

〈は　じ　め　に〉

昭和49年６月に無医大県をなくすために宮崎にも医科大学が開設され、開設と同時に熊本大学より木村教授（当時助教授）が赴任されたが、その後約３年間の準備期間を要して昭和52年10月にやっと附属病院が開院して当整形外科学教室もいわゆる「医局」の体をなすようになった。以後続々と入局者が増えたが比較的短期間で退局された先生も多く、昭和55年までの入局者の３年生存率は10人/17人(58.8%)、同じく５年生存率は９人/17人(52.9%)でこの期間における入局者17人中存局２年未満の者は６人もいる。その後（昭和56年以後）主に当大学を卒業した入局者が増えるに従い３年生存率も向上してきている。医局員の生存率（定着率）が向上するに従って、診療、研究も漸次充実しつつあり、又関連病院も増加しつつあるがまだ十分なものとは言えない感じがある。今後の医局、同門の発展に寄与するために医局員の生存率を参考にして当医局の問題点を取り上げ検討することにより今後のより良い医局並びに同門の発展を期したい。

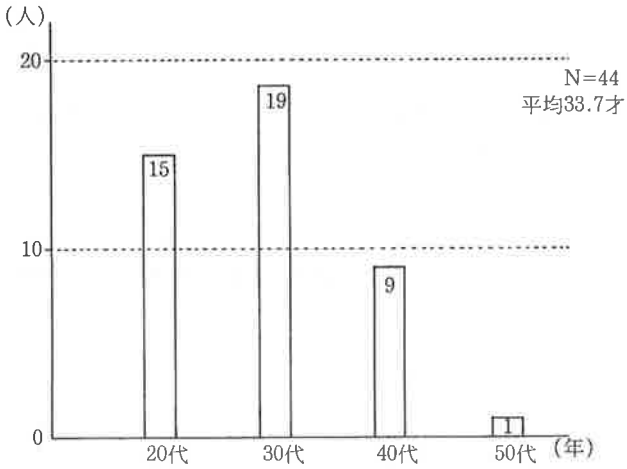
〈対象並びに方法〉

対象は宮崎医科大学整形外科同門会会員50名中の正会員44名（表－1)である。性別はすべて男性。平均年令は33.7才である。年令分布は図－1に示す。生存率は少なくとも入局時点より３年以上を経過症例（同門会を脱会したdrop outの１症例を含む）33例について算出した。解析に先立って入局者を初期入局群G_1(S52～S55年末）(N=17)と中期入局群G_2(S56年～S59年）(N=16)の２つのグループに分けた。なお解析の対象とはならないが入局後３年に達しない者を最新入局群 G_3（N=11）とした。

表－１　同門会員の内訳

	正会員	賛助会員	計（単位：人）
G_1：初期入局（入会）群	17(16)	3	20(19)
G_2：中期入局（入会）群	16	1	17
G_3：最新入局（入会）群	11	2	13
	44(43)	6	50(49)

（　）内は現在会員数



図－1　同門会誌会員の年齢分布(除・木村教授)

〈結　　果〉

表－2　医局員生存率

	3年生存率	5年生存率
G_1(N＝17)	10／17（58.8％）	9／17（52.9％）
G_2(N＝16)	15／16（93.8％）	7／8（87.5％）

1. G_1グループの3年生存率は10/17(58.8%)であり、一方 drop out 症例7/17(41.2%)のうち2年未満の存局者は6例にも達している。

   又、G_1グループの5年生存率は9/17(52.9%)と約半数の症例の脱落がみられた。

2. G_2グループの3年生存率は15/16(93.8%)、5年生存率は7/8(87.5%)といずれも比較的良好な成績を示した。

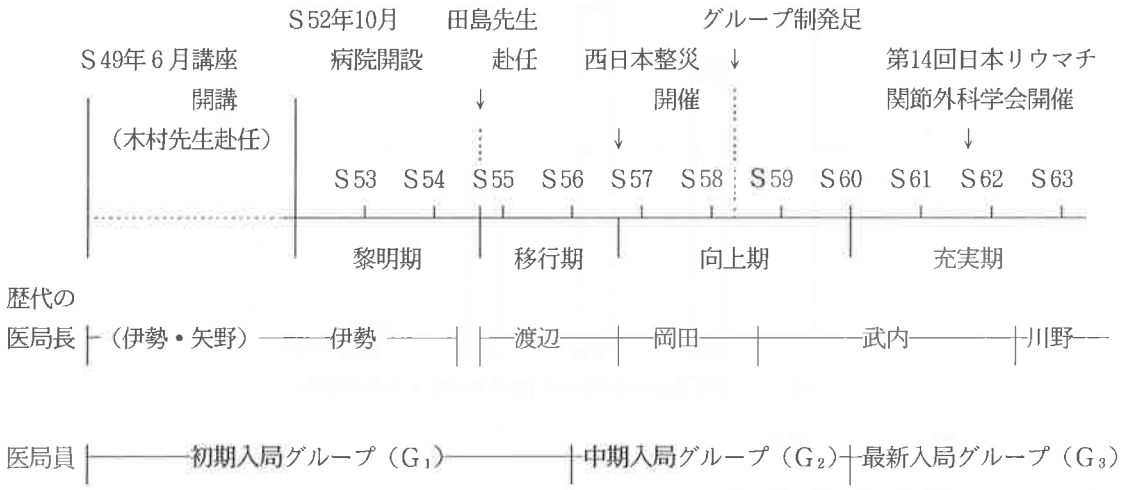
3. G_3グループについては経過が3年未満で解析の対象にはならなかったが、drop outの症例はまだみられていない。

〈考　　察〉

医局の歴史はさながら戦国時代の国盗り物語りのようなものである。三国志を例にとると、今から約1800年前の中国大陸の後漢末、群雄割拠して曹操の魏、孫権の呉、劉備玄徳の蜀の三国が形成されたが、蜀を創るための苦労は大変なものであった。医局で例えてみる。その前に医局の歴史を黎明期、移行期、向上期、充実期の4期に区切る(図－2)。まず黎明期（混迷期）においては、桃園（清武）に義を結んだ関羽（伊勢先生）、張飛（矢野先生）は約5年で大学を去り、昭和54年1月苦難を乗りこえて教授になられた玄徳（木村先生）のみが残り、三顧の礼により長崎より諸葛孔明に当る人物(田島助教授)が来宮される前までこの時期は惨憺たるものであった。一時は兵も底をつき1人で10人もの受持ち患者をもつ時期（武内は最大12人受け持った）もありやっと生きのびたという時期であった。そのため研究どころではなかった。

昭和54年11月田島先生が赴任され（これ以後昭和56年5月までを移行期と呼ぶが）、その後踵を接するが如く山口先生、渡辺先生、川野先生が入局され教室に活気が出てきた。とくに脊椎外科での診療がより充実した。

図－2　医局の歴史



渡辺先生は昭和55年1月赴任されたが、我々に膝疾患に対するオリエンテーションを与えて頂いた。しかし豪放磊落であった渡辺先生が1年半後に退局される直前頃は研究棟の窓より双石山の方を寂しそうに眺めておられた後姿が思い出される。この時期までの生存率の低さの原因を解くヒントがこの後姿に秘められているのではないかと思われる。

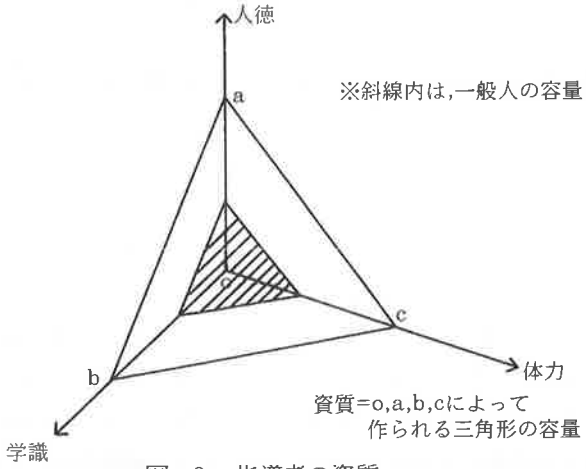
昭和56年6月から昭和59年末までを向上期と呼ぶ。昭和56年6月、出口、三浦、森山の各先生が当大学卒業生としては初めて入局され、以後当大学卒業者が入局者の大部分を占めるようになると生存率(定着率)も飛躍的に向上し、又教授の『学問に対する情熱』と田島先生の『研究及び診療に対する意欲とバイタリティー』によりようやく『大学としての活動』が向上してきた。又昭和58年3月より「グループ制」も発足し、研究及び診療の体制の基盤も整い現在に至っている。

昭和60年以降現在までを充実期と呼ぶ。昭和59年1月に入局され臥薪嘗胆されていた長鶴先生は1年間の雌伏より立ち上がられ、当医局をより充実したものに導かれた。一方木村教授は第14回日本リウマチ・関節外科学会の会長となられ昭和61年10月宮崎でこの学会を開催され成功のうちに終えられた。

以上の経過より生存率左右する因子について考察すると、初期入局群G_1(N=17)の生存率の低さの原因は、医局員が少ないことにより1人当たりの仕事負荷量が過大となりそのため退局するものが出現し、そのために1人当たりの負荷量がさらに増大するという悪循環を生じたため、及び入局するときから短期間の在局後開業を目的とした先生もおられたためと思われる。しかし他にも原因が何かあったのかもしれない。又中期入局群G_2(N=16)においては、3年生存率、5年生存率とも向上しているが、この原因は当大学卒業の入局者の割合が増加したこと、および研究診療の体制が整備され各種領域疾患にある程度対応できるようになり、医局としての魅力が増加したためと思われる。これも偏(ひとえ)に木村教授の指導力によると考えるが如何であろうか。

考うるに、指導者の資質とは、人徳、学識、体力のいずれにも優れていることと推察される。これを模式図にすれば図−3の如くなる。点OABに

よって規定される容積が大きい程その資質があると考えている。木村教授はすでにそれを満たされたが故に教授になっておられるのであろうが、次の後継者にもそのような資質を有する人物をそろそろ選び始められ、他の大学からの徒なる介入を避けて頂くことが医局員の生存率をさらに向上させ又我々同門の発展にとっても最も望ましいことと考える。



図－3　指導者の資質

〈ま　と　め〉

1. 医局員の生存率は昭和56年以後著しく向上した。
2. 今後の展望として、生存率をより向上させるためには木村教授の如き優れた資質を有する後継者の出現が望まれる。

研　修　医　の　頃

平　川　俊　一

私が研修医だったのは、昭和55年６月から翌年の７月まで、13か月間であった。普通の人のように24か月でなかったのは、ただひとえに人間が少なかったためで、ポストを埋めるための人事だった。一緒に入局したのは戸田先生で、二人で相談して一度は断ったのを覚えている。

当時は研修医は３名、総数でも10名の小医局だった。毎日がアナムネ、包交、点滴、鉤引きで終わっていた。外来日には先ずアナムネ、暇を見つけて点滴かガーゼ交換に走ります。大体これで昼過ぎまでつぶれます。午後はミエロやいろんな検査で汗をかいて夕方になります。ベシュライバーに付いて先輩の診察のテクニックを覚えるとか言うのは夢のまた夢で、一体いつ外来ができるようになったのか、いつの間にか口だけがうまくなったような気がします。受持ち患者のところに行くのは、患者の夕食が終わってからと相場は決まっていました。患者さんから『先生たちは忙しいですね。また今日も当直ですか。』よく言われたものでした。私の最高は７連直でした。そんな日々からのエピソードを書きます。

当時は大腿骨頸部骨折の患者が結構いて、病棟

や外来で鋼線牽引をよくやってました。最初に覚えたテクニックがこれだったような気がします。山口先生がされるところを１度見ました。そのあと数日して、患者が入院して受持ち医ということになりましたが、看護婦は鋼線牽引の準備をすまして早くして欲しそうに待っています。病棟、外来を見回しても手の空いているオーベンは一人もおられず、皆さん忙しそうに外来をされています。そこで意を決して数日前の手順を思い出しながら、必死にやってしまいました。良いも悪いも何とか済ませて外来に戻ると、当時の医局長の渡辺先生が今日の入院患者のことを思い出され、『後で鋼線牽引をするぞ』とおっしゃいました。そこで『いや、もうやってしまいました』と言いましたところ、『誰か見ててくれたか』と言われますので『いや、初めてでしたけど一人でやってみましたが』と言ったところ、突如病棟に走っていってしまわれました。しばらくして、胸をなでおろしながら戻ってみえましたが、一言『今度からは俺に前もって言えよ』今考えるととんでもない出来事で、患者さんもたまったものではないと思うのです。またオーベンもこんな研修医がいたのでは心の休まる暇もなかったのではと、同情いたします。とにもかくにも医師の絶対数が足りず、何でもやっつけ仕事になったのは仕方のないことでした。そのような忙しい毎日のなかで、何も知らない研修医を指導してくださった先輩方に感謝いたします。

８年間の間に色んなことがありました。もっと良い医局を、ほかの科の人からも羨ましがられるような医局を、創ろうと頑張ってきたつもりですが、まだまだ遠い道のりのようです。もっと勉強しろという自分の声と、これぐらいでもうよだきいなという自分の声の間でうろうろしています。もっと頑張らなくてはいけないのですが、正直にいうと少々くたびれてきました。とりあえず気を取り直して、もうひと頑ばり。

医　局　旅　行

戸田　勝

もう数年前のことになりますが、一泊二日の日程で南郷町の大島に医局旅行をしたことがありました。八月というのに天気はあまりぱっとせず、時々雨が降るというあいにくのコンディションでした。宿泊先は大島の民宿でとにかく夕方までに島の対岸の目井津港に集合すれば、漁船で大島まで送ってくれるということでした。土曜の昼から大学を出発して、この近くで海水浴を楽しみ、集った人が多かったようです。釣り好きの僕は、当時、父の持っていたボロ船があったのでH先生とM先生ともう一人たぶん４人だったと思いますが、油津港より出て船釣りを楽しみそのまま大島に向かう予定でした。まずボロ船についてはいわゆる和船つまり漁船タイプなのですが、１トンもない小さい船でエンジンは３馬力と（小さい）^{2}でしたので全速力でも人がかけ足する位のものでした。船頭の腕は、船をしのぐ不確かさでしたのでやっとのことで港を出て、ポイントである防波堤の外へやってきました。雨もあまりふらず、ゴカイのエサでキスやエバ、メゴチ等を２、３時間程釣って、夕食の魚の肴ができ、これで他の人たちにも面目がたつだろうと（どうせあてにはならんといわれていた）、そろそろ大島に行こうということになりました。大島は油津港から数kmの所に浮かんで

いる、小さい山と大きい山が連なったような南北に長い島で両端に港がありました。僕たちはこのうちの大きい方の北側の港に向かっていました。やがて島の方から雨がやってくるのがわかったかと思うや、みるまに大粒の雨がふり出し、今まで見えていた大島が全く見えなくなり、振り返えると対岸の方も同じでした。ほんの５分位ではありましたが、Ｔ先生やＭ先生も“遭難”の二文字が頭にちらついていたようでした。雨はそれから強くはないのですが、止みませんでした。どうにか北側の港に着き、陸にあがると、皆、ほっとして、さて早く宿に行こうということになりました。土地の人に宿の場所を尋ねると「この道を行けば、ありますよ。」と言われ、その言葉から遠くはないと思い込み、坂道を登り始めました。クーラーなどの荷物は重いし、雨にぬれて寒くなるし、空腹にはなってくるし、日は暮れてくるしで心細くなってきました。道は一本道なのですが曲がりくねっており、皆で「あの曲がり角の向こうにはきっとあるよ」と励まし合って登りました。その角までくると、ありました、遠くに家らしいものが見えます。皆、元気を取りもどしそこまでたどりつくとその家らしいものは確かに家ではありましたが、人の住んでいない家でした。そして、また足どりが重くなるという具合で、そんなこんなをくり返し、30分以上歩いたでしょうか、島の人に道を尋ねてから人一人、家（廃屋を除く）一軒なかったのです。もう無言の行列でした。（天は我を見放したか?）とある角を曲がると、そこにあったのは廃屋とは思えない建物と見覚えのある人々の姿でした。接着された切断指に血流が再開するが如くに、４人は顔色がみるみる良くなり、やれやれ助かったと胸をなでおろしました。南の港からは、５分とかからない所にあったのですが、北の港からだと島を縦断しなければならなかったのでした。民宿といっても普通の民家の貸し切りで夕食は離れた家から運ばれてきました。豪華な海の幸を期待していた僕には期待はずれの田舎料理でしたが他の人には意外と好評のようでした。日勤を終えた人を迎えに南の港に行き、一緒に花火をしたり、差し入れのアイスを食べたり、ひとしきり遊んだ後、宿に帰りました。畳の上で人間波乗り（誰が言い出したのか定かではない）なるものをやったりしました。フトンといえばしっとりひんやりとして、湿った感じでまあよく眠れたものだと思います。一部には遅くまで騒いでいた人もいたようですが、各人勝手に眠い人から順々に休んでいったようで、いわゆるザコ寝でした。次の日も午前中は雨でした。廃校になった小学校があると聞き皆で見に行きました。現在は島の人々の集会所になっているとのことで痛んではいないのですが何かしら寂しいものでした。体育館に入ると、皆、童心に帰ったのでしょうか、本当の子供のようにドッヂボールなどをして遊びました。とにかくみんな真剣なのです、大学でのことなどすっかり忘れているかの様でした。今、考えるとおかしい位です。午後から雨もあがり、海水浴をする人、早目に帰る人等に分かれました。僕は前日の出来事に懲りないＭ先生とＭさん、Ｋさんと船釣りを楽しみました。この旅行は天候にも恵まれず、遊ぶ施設もなく、とんだところに来てしまったとその時は思ったものでしたが、何故かなつかしい記憶の一頁となっています。

フィクション第２５回西日本野球大会

松　本　宏　一

雨が降っていた。昭和57年８月22日薄明、博多の街はまだ眠っていた。福岡市役所の道路を隔てた向い側にある東急ホテルアネックスの５階フロントロビーに十数名の男達が蹲っていた。試合開始の報を待っていたのである。

初戦は産業医科大学との戦いであった。打ちまくった。一方的にである。野球部創立以来初めての勝利である。チームの意気は揚々とした。

次の相手は大敵福岡大学であった。５イニングを戦う。我チームは、投手新鋭中村、捕手甲子園市原、一塁ゴルフスイング戸田、二塁主将岡田、三塁監督山口、遊撃助人長崎、右翼股関節平川、中堅怪足松本、左翼髭の川野という錚々たる顔触れである。

３回表、小雨は風を交えて大粒になってきた。敵軍応援団は雨中濡れたＴシャツの下、肌も露に狂気の檄を飛ばしていた。２死満塁。３番川野に動揺がみられた。バッターボックスをはずし、ゆっくりと味方ベンチを見た。我にも女神あり。雨に濡れて顔に纏いつく髪の毛もそのままに麗子嬢は視線をバッターに一心不乱に注いでいた。もう見るも聞くもない。川野は初球をフルスイングした。ショートライナー。敵遊撃手は腰を落として球を捕った。球は股間を抜けていた。球は左中間を割ってフェンスに当たった。ランニングホームランであった。

最終５回裏、福岡大学も次第に実力を発揮し、７対７としていた。２死一塁二塁。投手中村は両手をふりかぶり、投げた。外角ストレート。敵はバットを軽く合わせた。球はライトへフラフラと上がり、平川はじっと上空を見上げたまま動かなかった。捕った。試合終了。引き分けた、と私は思った。平川も川野もそう思った。そう思いながらスコアボードを見ると８対７となっていた。勝ちである。

何という素早さだ。敵軍団と審判の目を盗み、そして味方にも気づかれず、あの時スコアボードをこっそりと入れ換えたのは一体誰だったのかと、私は今でも思うのであります。

爾来、準優勝という栄光と重圧は我野球部に巣くってしまったのであります。

－続く－

車椅子バスケットボールティーム“サンライズ”と私

田　島　直　也

約10年前、当時私は長崎三菱病院に在職していた。その頃長崎県車椅子バスケットボールティームを作る話が持ち上り、私を監督にと周囲からすすめられ引き受ける事にした。

私とバスケットとは中学１年の４月から、バスケ部に入り、高校で一時中断するも大学６年間もやり、なじみがあった事、又昭和46年太陽の家の創設者である故中村裕先生の推薦でイギリスの

Stoke Mandeville Hospital（国立脊損センター）Sir Ludwig Guttmannが創立に留学する機会があり、Paraplegiaのリハ・スポーツに直接接し、私自身関心が強かった事によった。

新しいティーム名は“サンライズ”といった。早速週2~3回の練習から開始したが、ティームは年令、障害のレベルの他、原因も労災、交通事故自損等、現在仕事をしている人、していない人、補償がある人、ない人と種々様々であった。又地域的にも一応全県下という事で選手達も集まるのに大変であった。しかし多くのボランティアの人の助けで練習は続けていった。初めは車椅子の操作、ダッシュ、リターン、ラニングシュート、ミドルシュートの他、守備、攻撃のフォーメンションと出来るだけの練習をした。この頃現監督の山田さん(Pt)も参加してくれ大分助かった。やがて他ティームと練習試合を行うようになった。他ティームといっても県外ティームである。しかし、いくら試合しても敗戦の連続であった。選手自身もスポーツに参加している事、又強力ティームに対し少しでも善戦するとそれに満足してしまう風潮が感じられ、私自身もここからの脱出方法がわからないでいた。

昭和53年夏、宮崎で西日本車椅子バスケ大会があり、私も選手と共に鹿児島本線、日豊線を乗りついで参加した。しかし上位進出というより一回戦突破が当面の問題であった。この時、翌年から宮崎に赴任する事になるなど夢にも考えていなかった。昭和54年11月、宮崎に赴任したが、翌55年、朝日新聞の後援で第一回九州朝日車椅子バスケ大会が長崎で開催する事が決まり、ボランティアの人を含め、すでに準備に入り、私も大会委員長という事になっていた。昭和55年、大会は無事終了し、サンライズの力はまだまだのまま私は別れをつげた。

それから７年たち、第８回九州朝日車椅子バスケ大会は昭和62年10月、14ティームが参加し宮崎で開催された。

サンライズは女性コーチも加わり、ティームは一新していたが、発足当時のメンバーも大分残っていた。一回戦、二回戦は勝ち進み、準決勝で優勝候補№１の太陽の家バスケクラブと対戦、前半は逆に１点リードするも、後半10分すぎからはなされ、決勝進出はならなかった。続いての３位決定戦は地元の宮崎、延岡トータスクラブと対戦、お互い最終戦とあって、激しい試合で車椅子のふれあう音、転倒する者とスピードとスリルの連続であった。前半は互格また後半の10分すぎから少しずつリードされ、time up3分前に５点差となり敗戦濃厚となった。しかしここから全コートアタックが巧を戻し、time up寸前の逆転シュートがきまった。監督、コーチも涙ぐみ、声もなく、“先生の前でぶざまな試合はしないよう頑張った。”という選手達と私も一人一人握手をした。中には事故の後、婚約者にも去られ、自暴自棄からの出発者もいるし、いずれも人生途中の不慮の事故からの出発者である。

彼らのバイタリティーに私の方が、教えられる事が多かったのではないか。

サンライズの栄光を祈る

終

国立療養所宮崎病院の紹介

宮崎県児湯郡川南町大字川南19403番地の4
TEL(0983)27−1036

国立療養所宮崎病院は宮崎県のほぼ中央に位置する川南町に所在し、宮崎市より北方約35kmにあり、宮崎医科大学より車で約1時間15分ぐらいかかる。

当院は昭和14年に傷痍軍人宮崎療養所として宮崎市田吉（旧赤江町…現在宮崎東病院所在地）に創立された。その後幾多の変遷を経て、昭和22年に川南町の現在地に移り、昭和49年に国立療養所宮崎病院と改称され現在に至っている。

診療科目としては、外科、内科、小児科、整形外科、放射線科、歯科、皮膚科（月2回巡遣診療）があり、常勤医師は院長以下、外科4名、内科3名、小児科2名、整形外科1名、放射線科1名、歯科1名の計13名である。病床は420床あり、結核病床2棟100床、重心病床3棟120床、一般病床4棟200床である。

整形外科の診療は昭和53年より開始されているが、初期には外来診療が主であった。その後昭和58年岡田光司先生（現岡田整形外科院長）赴任時より5病棟をリハビリ、整形外科病棟として担当する様になり現在に至っている。

外来は月・火・木曜日の午前中におこなっており、患者数は季節によって変動はあるが1日平均30人ほどである。5病棟は50床あるが、うち10床は内科、外科のリハビリに利用しており、整形外科入院患者は約35名である。老人が多いせいか変形性関節症、脊椎症、骨組鬆症、RAなどの慢性疾患が多く、その他に骨折脱臼等の外傷、結核療養所であるため脊椎カリエスなどがある。手術は月・火曜日の午後行っており、骨折などの外傷が主である。大きな手術に際しては大学からの応援を頂いている。

当院のある県中央部には整形外科が少なく、また手術に際しては人手の足りないことなどもあり、今後整形外科医の増員が望まれるところである。

税　所　幸一郎

宮崎済生会日向病院

宮崎県東臼杵郡門川町大字門川尾末880
TEL(0982)63−1321・63−1162

済生会日向病院での１年間のローテーションもあと残すところ１カ月余りとなろうとしています。熊本市民病院からの人事決定の際今までの経緯より、選択権を委ねられ、当病院を選んだのが、昨日の如く思われます。

済生会病院の設立は、明治44年にさかのぼり、明治天皇が、施薬救療の途を講じられ、その基金として御手元金150万円を下賜されたことに始まります。本医院も、昭和10年、済生会延岡診療所として開所され、現在地には昭和33年、病床21床で開設されました。現在、162床であったところを増改築中であります。診療科は、内科（医師４名）、消化器内科(2名）、外科(2名）、整形外科(2名）であり、さらに今回の増築で、循環器内科の新設及び、整形を含め、病床数の増加による、医師の定員増が、予定されております。

整形外科は、当教室からは、脇山、木下、森田各先生の後の私で４人目であり、医長の先生として、従来は、県立延岡病院の先生方の４カ月のローテーションが行われていましたが、本年度より、手の外科を主として研究されてこられた、酒井健先生が常勤となられました。

外来は、月曜～土曜まで、午前中隔日で、それぞれ新患と再来を受持っています。病棟は外科との混合病棟で、整形外科として、30~32床程度あり、回診は、月曜と木曜の午後で、硬膜外ブロック及び星状神経節ブロック等回診後に行っています。手術日は、火曜と金曜（予備日－水曜）であり、１月から10月まで、約150例であり、手の外科が多い印象があります。その他、整形疾患を持つ患者に対する内科病棟の回診、外来及び病棟の検査を水曜午後、また、時間をみつけ行っています。また、併設された老人ホームの往診、日向市内の養護施設の検診を１月に１回行っています。この様な回転の速い病院では、診断書の多い事に苦労し、官舎に持ち帰って書く事も、たまにあります。病院全体としては、非常にスポーツに対する関心が高く、年に１回の済生会九州ブロックのソフトボール大会、月に１回(5月～9月）土曜の午後を利用してのゴルフコンペ等を行っており、それぞれ、ライバル意識むきだしです。

今後、当病院の施設及びスタッフの一層の充実がはかられるにあたり、働き甲斐のある医療施設として、発展していくことが、十分に期待されると思われます。

（昭和62年11月11日記）

川　越　正　一

公立多良木病院

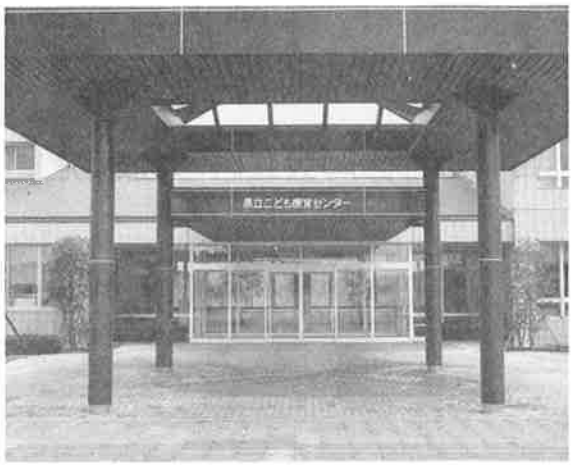
熊本県球磨郡多良木町大字多良木4210
TEL(09664)2−2560

当病院は、明治12年人吉公立病院多良木分院として設立され、この後、医療設備を拡充、刷新すべく昭和59年に総工費23億円をかけ現在地に新築移転されました。内科、小児科、外科、整形外科、脳神経外科、眼科、耳鼻咽喉科、産婦人科、歯科、皮フ科の各診療科をそろえた、ベッド数199床の球磨群最大の病院です。東に市房杉で有名な市房山を望み、名産球磨焼酎をはじめ、鮎や山女に梨や葡萄と豊かな自然に恵まれています。また近くには人吉チサンカントリー、球磨カントリーといった２つのゴルフコースをはじめ、全天候型テニスコート（年内に病院内にも一面完成予定）を点在する好環境にあります。

さて、我々の勤務している整形外科ですが、昭和38年３月１日に大宮和郎先生より診察が開始され、昭和59年からは当教室より常勤を派遣しています。一日の平均外来患者数70名、入院患者数約25名、一ヵ月の手術件数15例程度を常勤２名でこなしております。

最近のヒットはナマズです。病院前の小川にまさかと思いながらも、ミミズを餌に仕掛けを一晩つけておいたところ、体長20㎝のナマズが釣れていました。患者さんや職員に見つからないよう、暗くなるのを待って仕掛を沈め、朝早くそれを取り込むという研修医（金井純次先生）にうってつけの仕事が今後増えそうです。お近くにお越しの折はナマズ見物がてら是非お立ち寄り下さい。今なら抹茶のサービスも付いておりますので。

三　浦　広　典



宮崎県立こども療育センター

宮崎県宮崎郡清武町大字木原4257−8
TEL(0985)85−6500・6501

県内での肢体不自由児施設設置運動が昭和28年頃より始まり、同33年予算成立(3,150万円)、翌年建設工事竣工し、園児50名を迎えて、宮崎市本郷南方に県立整肢学園として開園しました。以後25年間にわたって、脊髄性小児麻痺、脳性麻痺を主とした肢体不自由児施設として県内の中核的役割を果たしてきましたが、昭和59年、宮崎学園都市開発整備事業の一環として学園都市内に福祉ゾーンを整備する宮崎県学園都市関連施設基本計画の決定に従い、翌年より総事業費13億2000万円をかけて、清武町への新築移転工事が始まりました。そして今年の4月、県立整肢学園は、「こども療育センター」と「清武養護学校」とそれぞれ分離独立し、新しい一歩を踏み出したところです。

センター内は、一般入園部門(定員60名)、母子入園部門(定員5組)、通園部門(定員20名)、外来部門と分かれており、医療、教育、生活面等様々な立場からこども達へのアプローチが行われています。医療面では、3名の常勤医師と7名の非常勤医師、8名の訓練士、41名の看護婦、X線技士、薬剤士各1名を擁し、手術を含めた整形外科的治療、小児科的治療、泌尿器科的治療、歯科治療及び理学療法、各種機能訓練等多方面にわたる専門的治療を充実させるとともに、各部門の協力のもとに総合的医療を目ざしております。

また、センターの隣接地に県立整肢学園より分離独立した清武養護学校が設置されており、近年中に設置が予定されている宮崎南養護学校、ひまわり学園等を含め、児童の教育環境も充実しつつあります。

将来生活を営む上に支障のある肢体不自由児を収容し、高度の医療を施し、損われた機能の回復を図る一方、義務教育を授けながら適切な生活環境を与え集団生活を通じて将来社会に独立自活のできるよう児童の健全な成長をはかる総合的療育の実現に、スタッフ一同、日夜努力を続けております。今後とも諸先生方の御理解と暖かい御支援をお願い申しあげます。

(昭和62年11月)

松　田　寿　義

宮崎市郡医師会立医師会病院

宮崎県宮崎市新別府町船戸738−1
TEL(0985)24−9119

宮崎市郡医師会病院は、医師会会員による地域社会に貢献するための医師会活動の拠点として、また会員の卒後教育、生涯研修の場として、昭和59年４月に宮崎市新別府町に設立されたオープンシステムの病院です。総病床数は200床で、診療科目は内科、外科、整形外科、産婦人科、放射線科、麻酔科が常勤でおり、他の科目については医師会会員が非常勤で応援する形態がとられています。

整形外科は開院当初よりありましたが、大学関連病院としては昭和62年７月より、桑原、麻生、の２名が初めて常勤として派遣され、現在に至っております。整形外科の病床数は約30床で、手術件数は月平均約21件であり、外傷が主体となっています。

本院の特徴は何といっても外来が無く、すべて入院を必要とする紹介患者であり、病棟業務と手術に大半の時間を費やすことができることで、パラメディカルも併設されている宮崎市夜間急病センターの業務を兼ねて24時間体制をとっていることと相まって、臨床をやるうえでは非常に恵まれた病院といえるでしょう。

さて、当院整形外科の伝統といえるようなものは私が大学派遣の初代医長なので未だ出来ておりません。そこで私は、『臨床も研究も遊びも偏らずにやること』を基本方針とし、大学での抄読会や研究への参加、本院では抄読会（月曜日）、レントゲンカンファレンス（水曜日）を麻生君共々義務づけてやっております。

最後に当院は症例も多く、他科との連携もスムーズで仕事のしやすい病院です。教室の若い先生方も機会がありましたらどうぞおいで下さい。歓迎いたします。

桑　原　　茂

研修生自己紹介

氏　　名　松　田　寿　義
生年月日　昭和35年６月３日生　独身
出身高校　延岡高校
出身大学　宮崎医科大学

生まれも育ちも延岡です。延岡というとすぐに旭化成を連想しますが、それと同時に、山、川、海などの自然に恵まれた土地でもあります。古くは、内藤藩七万石の城下町として栄え、城跡のある城山には、若山牧水が「なつかしき城山の鐘」とうたった鐘が残っております。高校までの18年間を延岡で暮らし、昭和54年４月宮崎医科大学入学に際し、その延岡を離れ１人暮らし９年目を迎えました。大学生活が７年間（勉強が好きだったので人より長く在学しました）、研修医として２年めです。昭和61年６月宮崎医科大学整形外科学教室に入局し、同12月より県立宮崎病院麻酔科、62年６月江南病院、同７月より県立こども療育センターにて研修し、現在に至っております。まだ、右も左もわからない新米ですが、諸先生方、宜しく御指導お願い致します。

氏　　名　金　井　純　次
生年月日　昭和34年４月３日
出身高校　宮崎西高校
出身大学　宮崎医科大学

医師となって１年半。学生の頃より整形外科医を目指していながら生来の天の邪鬼のせいか卒業後１年間は福岡にて内科の研修、今年の４月に慌てて帰省し入局、それを待っていたかのように長男の誕生、７月からは三浦先生の下に公立多良木病院に赴任と何となく慌ただしかった一年でした。現在、多良木病院で三浦先生の片腕（否、ひょっとすると御荷物?)として外来でも一部の患者を診させてもらっていますが、いかんせん知識の貧困さ故、レントゲン写真を眺めながらクルズス片手に患者への説明、と言うより説得に四苦八苦の毎日です。

大学病院は３カ月間と短期間でしたが諸先生方に整形外科医としての基本を教えていただき、三浦先生には一次病院での整形外科医の仕事、そして田舎での余暇の過し方（テニス、やまめ釣り、ビリヤード）を伝授してもらい公私共々大変お世話になっています。今後とも宜しく御指導下さい。

氏　　名　田　辺　龍　樹
生年月日　昭和35年７月22日　独身
出身高校　日向学院高校
出身大学　宮崎医科大学

整形外科に入局して、早や半年が過ぎようとしています。入局して４ケ月程たち、大学の当直をしていた日曜日のことです。右前腕のcolles骨折の急患が来院し、横に本を置きながら汗をかきかき、整復しましたが、何度行っても十分な整復位まで戻らず、中途半端なままギブス固定し、また明日来るように言いました。患者が帰った後、入局してすぐ某Drから言われた「よく修練して、患者からただの骨つぎどんと言われないように。」という言葉を思い出して、「自分はただの骨つぎどんにもなれなかったな。」と落ち込んだものでした。

朝、顔をあらうのもそこそこに、大学に通勤し、仕事し、大学でめし食い、灯りのついてないまっ暗な部屋に帰る毎日がつづきますが、毎日が新しいこととの出会いであり、毎日気が張っており、今年は不思議とまだ風邪もひいていません。

今後とも、色々と御迷惑をかけることと思いますが、先生方、御指導の程よろしくお願い致します。

氏　　名　鳥取部　光　司
生年月日　昭和37年６月21日　独身
出身高校　宮崎南高校
出身大学　宮崎医科大学

私が、整形外科に入局することに決まったのは、国試の合格発表の後の入局確認の電話でした。

さて、入局から半年近く経過しましたが、いろいろなことが思い出されます。始めの頃は、点滴ひとつにしても冷汗が出る思いでした。又、手術、CC、回診等、緊張の連続でした。諸先生方の仕事に、ただついてまわるのに大変で、何をやっているのかもよくわからず、気がつくと、一日が終わっていました。

そういう中で、諸先生方に様々な御意見、アドバイスをうけてきて、基本知識がなく、吸収できなかった部分もあると思いますが、これからも努力していくつもりですので、今後とも宜しく御指導お願いします。

氏　　名　黒　田　　宏
生年月日　昭和37年２月12日
出身高校　延岡西高校
出身大学　宮崎医科大学

自己紹介　1962年２月．宮崎県の北のはずれ高千穂町で産湯につかった私は、少年期の多感な時期をこの何もない山奥で過ごした。そんな純真な私が、高校入学と同時に延岡という都会に行ったのだが、ここで大きな障害にぶちあたってしまった。言葉である。御存知の方もいらっしゃると思いますが、高千穂弁というのは熊本弁に近く、これを使うとずい分馬鹿にされたものでした。そして１年間の国内留学の後、宮崎医科大学へ入学。１年生の初夏には早々と相手をみつけ、卒業と同時に結婚、入局となった。入局当時は慣れない仕事に体力を使い、神経を擦り減らし、新婚生活もままならない日々が続いたが、不思議なことに今年の夏には一児の父親である。ちなみに私はＡ型、几帳面な性格で生真面目である。どんなに忙しくてもやることはやる。ところで入局してから半年、初めは学生と間違えられていた私も諸先輩方の親切な御指導により、何とか医師としてみられる様になった気がします。今後ともよろしく御願い致します。

氏　　名　久　保　伸一郎
生年月日　昭和38年３月13日　独身
出身高校　都城泉ケ丘高校
出身大学　宮崎医科大学

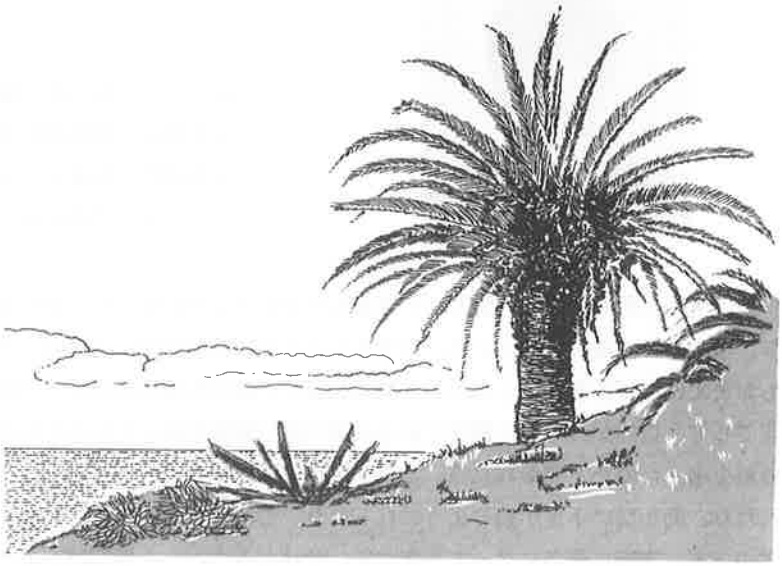
此の度は宮医大整形外科に入局させて頂きありがとうございました。早いもので、入局以来すでに半年が経ち、当直の日の電話の音にいちいちドキドキしていたのがだいぶ前のことのように感じられます。そもそもおまえはなぜ医者になったのかと問われると、聞かれる相手によっては少し困ってしまうというのが本音でして、自然がつくった傑作である人間の体に興味があったからとしか答えられません。又、なぜ整形外科を選んだのかと聞かれたら、これまた自分本位な考えでして、手術その他の技術によって、痛みがとれたり、動かない手足が動くようになったり、これはおもしろそうだし、やりがいがあるなと思ったからなのです。実際に医者になってみますと、なぜだろうという疑問ばかりで、医学の世界は汲めどもつきぬ「？」の泉ではないのだろうかという感を強くしております。今後とも御迷惑をおかけすることが多いかと思いますが、諸先生宜しく御指導下さい。

氏　　名　植　村　貞　仁
生年月日　昭和30年６月８日生
出身高校　宮崎南高校
出身大学　宮崎医科大学医学部
家族構成　妻、息子(3歳)

整形外科に入局して早くも６ケ月が過ぎてしまいました。この６ケ月は、RA・下肢斑に所属して、病棟・外来・手術にて、基本的な事を学ばせてもらいましたが、まだまだ自分自身で判断できない事ばかりです。

この半年間、暖かく御指導下さいました、武内先生、脇山先生をはじめ、諸先生方に深く感謝致します。

１月から半年間は、子供療育センターにお世話になりますが、大学を離れても、御指導の程、よろしくお願い致します。



教室同門の研究業績
（昭和５４年６月以降）

著書発表

1　慢性関節リウマチ

木村　千仞
医師国家試験のための整形外科重要用語事典
（青木　虎吉，阿部　光俊，長　紀元編）269～278，　1984
（金原出版KK.　東京）

2　偏平足障害

木村　千仞
今日の治療指針　553～554，　1984
（医学書院　東京）

3　強直性脊椎炎

木村　千仞
整形外科Ｑ＆Ａ
2.（河路　渡，三浦　幸雄編）117～119，　1985
（南江堂　東京）

4　変形性関節症

木村　千仞
整形外科Ｑ＆Ａ
2.（河路　渡，三浦　幸雄編）120～122，　1985
（南江堂　東京）

5　ＡＤＬ〔２〕
ＲＡにおける機能障害評価法への試み

木村　千仞　　武内　晴明
免疫調節剤の薬効検定
（日本リウマチ協会編）139～151，　1985
（永井書店　東京）

6　今日の治療指針　1985　Vol　27（分担執筆）

田島　直也
脊椎分離こり症　541，　1985
（医学書院　東京）

7　整形外科　Mook　41

田島　直也

腰部脊椎管狭窄症

黄色靱帯因子　　61～67,　1985

（金原出版KK.　東京）

8　整形外科Ｑ＆Ａ　1　総論

田島　直也

（河路　　渡，三浦　幸雄編）18～24,　1986

（金原出版KK.　　東京）

9　頚椎－とくに上位頚椎外傷の診断には断層撮影，ＣＴ検査を！

骨折．外傷シリーズ３　脊椎の外傷　その１

田島　直也

（榊田　喜三郎，山本　真監修）52,　1986

（南江堂　東京）

10　今日の整形外科治療指針　　500page

椎弓切除後の脊椎変形　脊椎過敏症

田島　直也

（山内　裕雄，真角　昭吾，辻　陽雄，桜井　実編）

321～322,　1987

（医学書院　東京）

原著　症例報告ほか

1　関節リウマチにおける骨塩分析（第２報）

木村　千仭　　武内　晴明　　戸田　　勝　　平川　俊一

日整会誌58　：　367～368,　1984

2　変性性腰部脊椎管狭窄症の病態（抄）

田島　直也　　川野桂一郎　　出口　義宏　　三浦　広典

*瀬良　敬祐

（*長崎三菱病院　整形外科）

日整会誌　58（11）：　159～60,　1984

3　リウマチの臨床

— 診断・治療を中心として —

木村　千仞

日医新報　3149：　23〜29,　1984

4　ゴルフスイングによる第７頚椎棘突起骨折についての検討

*押川紘一郎　　田島　直也　　山口　一郎

（ *押川整形外科）

整形外科と災害外科　32（３）：　651〜654,　1984

5　踵骨骨折におけるGraffin型ＰＴＢ装具の使用経験

*山本　恵央　*矢島　弘嗣　*山口　武史　　長鶴　義隆

*永岡　潤吉

（ *松原市立病院）

中部日本整災会誌,　1.27（5）：　2011 〜2013,　1984

6　慢性関節リウマチに対するTenoxicaの長期投与試験成績

*延永　　正　　木村　千仞ほか

（ *多施設検定）

基礎と臨床　18.（11）：　5983〜5997,　1984

7　慢性関節リウマチ患者の体力

木村　千仞　　出口　義宏

総合リハ　12.（11）：　859〜863,　1984

8　ＲＡに四肢のビ慢性硬結を合併した２例

戸田　　勝　　木村　千仞　　中村　誠司

九州リウマチ　３：　７〜10,　1984

9　慢性関節リウマチに対するメチルB_{12}の臨床効果

*近藤　正一　　木村　千仞ほか

（ *多施設検定）

臨床と研究　61（9）：　3005〜3012,　1984

10　Lumbar radiculopathyの検討

田島　直也　　川野桂一郎　　脇山　尚登

整形外科と災害外科　32（３）：　813〜818,　1984

11　大量の排膿を認め診断に難渋した化膿性脊椎炎の一例

川野桂一郎　　田島　直也　　木下　泰行　　税所幸一郎
木村　千仭
整形外科と災害外科　32（4）：　951～955,　1984

12　フェルデン（ピロキシカム）の臨床評価　　— 多施設共同試験成績 —

*天児　民和　　木村　千仭ほか
（ *多施設検定）
臨床と研究　　61（ 8）：　2623～2635,　1984

13　腰部疾患における再手術例の検討

*瀬良　敬祐　　*本多　重信　　*朝永　正剛　　*西野美貴子
*高橋　克郎　　*大里　裕治　　田島　直也
（ *長崎三菱病院　整形）
整形外科と災害外科　32（4）：　999～1003,　1984

14　Destruction of the Lumbar Vertebral due to Aneurysm of the Abdominal Aorta
A Case Report

N. Wakiyama , N. Tajima , K. Kawano ,　* T. Onitsuka ,
* Y. Koga
(*Dept. of Surg. Miyazaki Medical college.)
Orthopedics & Traumatology　33　(1) : 45 ～ 49
(Seikei geka to Saigai geka)　　1984

15　側弯症における hangingモアレの検討（第一報）

三浦　広典　　田島　直也　　川野桂一郎　　三股　恒夫
整形外科と災害外科　33（2）：　437～440,　1984

16　ＲＡにおけるステロイド使用患者と骨塩量

平川　俊一　　木村　千仭　　戸田　　勝　　出口　義宏
三浦　広典　　脇山　尚登
九州リウマチ　3：　60～63,　1984

17　Dynamic analysis of higher order activities of human postural sways

*N. Tajima　*I. Yamaguchi　*K. Sato　**Ch. Morisada
(* Research Foundation un Traffic Medicine)
(**Kinesiology　Research　Foundation)
Jpn. J. Hum. Posture　4（2）：　107～112,　1984

18　教室めぐり

宮崎医科大学整形外科学教室　田島直也

整形・災害外科　27. 13　　P. 1912　（1984）

19　細菌細胞壁ペプチドグリカンによりマウスに誘発される実験的関節炎

*古賀　敏生　*垣本　毅一　*広藤　卓雄　*小谷　尚三

*大国　寿士　*岡田　則子　*岡田　秀親　*住吉　昭信

税所幸一郎

（ *厚生省特定疾患　難病疾患モデル調査研究班）

20　健常者の脛骨神経Ｆ波の性状

*河合　尚志　*神代　敏之　　三浦　広典　　田代　宏一

（ *県立整肢学園）

宮崎医会誌　8　（12）：　71～74,　1984

21　宮崎地方における学童側弯症検診の検討

田島　直也

宮崎県予防医学協会（事業年報）115～118,　1984. 4～1985. 3

22　慢性関節リウマチ患者のＦ波

*河合　尚志　　木村　千仭　　木下　泰行　　中村　誠司

（ *県立整肢学園）

宮崎医会誌　9：　38～40,　1985

23　Cefmetazole(CMZ)の整形外科領域における組織移行の検討

木下　泰行　　木村　千仭　　福田　健二

診療と新薬　　２２　４：　855～861,　1985

24　職場検診からみた腰痛

*瀬良　敬祐　*本多　重信　*藤樹　　宏　*竹迫　純享

*大里　裕司　　田島　直也

（ *長崎三菱病院　整形）

整形外科・災害外科　28（５）：　671～ 677,　1985

25　頸肩腕症候群および肩関節周囲炎に対する

CS-600(Loxoprofen　Sodium)の臨床評価

－イブプロフェンを対照薬とした二重盲検比較試験－

*天児　民和　　木村　千仭　　田島　直也　　山口　一郎他

（ *多施設検定）

臨牀と研究　62（９）：214(2938)～229(2953),　1985

26　変形性膝関節症に対するＭＥＮ－ＯＭの臨床評価
—— 二重盲検群間比較試験による検討 ——

*高岸　直人　　木村　千仭　　*鈴木　勝己　　*緒方　　甫
*西尾　篤人　　*井上　明生
（ *多施設検定）
臨床評価　１３（１）：　229～256,　1985

27　腰椎疾患におけるMRI の臨床的評価
－Ｘ線CT, Myelography との比較検討

*杜若　陽祐　　*中山　幸子　　*村井　伸子　　*渡辺　克司
川野桂一郎　　田島　直也　　**木原　　康　　**岡田　明彦
**藤元登四郎
（ *宮崎医大　放射線科）
（**藤元病院）
NMR 医学（ 核磁年共鳴医学研究会雑誌）
5（２）：　71～78,　1985

28　Microgeodic diseaseの２症例

松本　宏一　　木村　千仭　　長鶴　義隆　　山口　一郎
福田　健二
宮崎医会誌　9（２）：　255～257,　1985

29　腰椎後方手術用フレームの検討

松本　宏一　　田島　直也　　出口　義宏　　川野桂一郎
森田　信二
整形外科と災害外科　34（１）：　392～395,　1985

30　Ｌumbar radiculopathyの検討　—— 第２報：再手術について

戸田　　勝　　田島　直也　　川野桂一郎　　福田　健二
帖佐　悦男
整形外科と災害外科　33（３）：50～53,　1985

31　距骨骨折の３例

武内　晴明　　木村　千仭　　岡田　光司　　河野　雅行
整形外科と災害外科, 33（３）：　687～690, 1985

32　側弯症に対する保存療法の検討
　　－特に装具療法について
中村　誠司　　田島　直也　　川野桂一郎　　平川　俊一
脇山　尚登　　木村　千仭
整形外科と災害外科　33（3）：　928～931,　1985

33　慢性関節リウマチ患者の体力
出口　義宏　　木村　千仭　　三浦　広典　　福田　健二
日関外誌　4（2）：　135～139,　1985

34　側弯症における矯正力の検討
　　－特にCasting 時の張力について
平川　俊一　　田島　直也　　川野桂一郎　　脇山　尚登
中村　誠司　　木村　千仭
整形外科と災害外科　33（3）：　932～935,　1985

35　職場検診からみた腰痛
*大里　裕司　　*瀬良　敬祐　　*本多　重信　　*竹迫　純享
田島　直也
（*長崎三菱病院　整形）
整形外科と災害外科　33（4）：1027～1031, 1985

36　リウマチにおける足の変形
木村　千仭
整形災害外科　２８（１０）：　1341～1347,　1985

37　慢性関節リウマチの診断と治療における幾つかの問題点
木村　千仭
山口県医学会誌 ２０　：　206～212,　1985

38　Intraarterial Injection Therapy for Relief of Severe Pain (Preliminary Report)
N. Tajima　C. Kimura　K. Kawano　N. Wakiyama
*K. Nagayoshi
（*Kushima Hospital　Miyazaki. Japan）
Jpn. J. Rheum. Joint surg　Ⅳ（3）：　45～251,　1985

39 Acute Joint Inflammation in Mice after Systemic Injection of the Cell Wall, Its Peptidoglycan, and Chemically Defined Peptidoglycan Subunits from Various Bacteria

* T. KOGA *K. KAKIMOTO *T. HIROFUJI *S. KOTANI
* H. OHKUNI *K. WATANABE *N. OKADA *H. OKADA,
* A. SUMIYOSHI, AND K. SAISHO
(*IInd Chir. of Miyazaki Med. Sch.)
INFECTION AND IMMUNITY, 1985, 27-34
0019-9567/85/100027-08$02.00/0
Copyright c 1985, American Society for Microbiology

40 Characterization of monoclonal antibody specific for human type II collagen: possible implication in collagen-induced arthritis

* T. HIROFUJI * K. KAKIMOTO * HISAE HORI * Y. NAGAI
K. SAISHO * A. SUMIYOSHI * T. KOGA
(*Pathol. of Miyazaki Med. Sch.)
Clin. exp. Immunol. 62, 159-166 , 1985

41 Cryomicrotomy of the Lumbar Spine

Tajima
Kawano
Spine 11 (4) : 376〜379, 1986

42 Recurrent Myocardial Infarction and Unexpected Sudden Death in a Cace of d-Loop d-Transposition of the Great Arteries Associated with Single Coronary Artery

* T. IMAMURA, M. D. *S. NAKAGAWA, M. D. * Y. KOIWAYA, M. D.
* K. TANAKA, M. D. K. SAISHO, M. D. * A. SUMIYOSHI, M. D.
(*Pathol. of Miyazaki Med. Sch.)
First Department of Intermal Medicine, and First Department of Pathology, Miyazaki Medical College, Miyazaki, Japan Clin. Cardiol. 9, 77-81(1986)
c Clinical Cardiology Publishing Co., Inc.

43 側弯症に対する私達の装具療法について

田島 直也 川野桂一郎 出口 義宏 中村 誠司
*牧田 光広
(*宮崎・都城マキタ義肢製作所)
日本義肢装具学会誌 2 (2) : 153〜158, 1986

44　慢性関節リウマチに対するＥＢ－３８２(Almincprofen)の長期臨床試験成績

水島　　裕　　木村　千仭　ほか

薬理と治療　１４：　685～706，1986

45　マレイン酸プログルメタシンの変形性膝関節症に対する治療効果

木村　千仭　　武内　晴明　ほか

薬理と治療　１４：　6611～6630，　1986

46　変形性股関節症術後ならびに慢性腰痛性疾患におけるクロタムの臨床的検討

木村　千仭　　田島　直也　　長鶴　義隆

診療と新薬　２３：　1353～1361，1986

47　研究会を聞く

第15回日本脊椎外科研究会

田島　直也

整形外科　37（11）：　1675～1678，1986

48　慢性関節リウマチの治療

木村　千仭

Physicians' Therapy Manual　３：８（６）．1986

49　腰椎手術例におけるMRI(Magnetic　Resonance Imaging)の検討

川野桂一郎　　田島　直也　　田代　宏一　　*杜若　陽祐

**藤元登四郎

（ *宮崎医大　放射線科 ）

（**都城・藤元病院　　）

整形外科と災害外科　34（３）：　829～833，　1986

50　慢性関節リウマチにおける内反母趾変形

平川　俊一　　木村　千仭　　田代　宏一　　永吉　康裕

整形外科と災害外科　34　：　1047 ～1050，1986

51　側弯症に対するHanging Moireについて（第二報）

帖佐　悦男　　田島　直也　　川野桂一郎　　出口　義宏

福田　健二　　川越　正一

整形外科と災害外科　34（４）：　1379～1384，1986

52　側弯症に対する Hanging EMG

出口　義宏　　田島　直也　　川野桂一郎　　川越　正一
黒木　俊政

整形外科と災害外科　35（1）：　99～103,　1986

53　Fibrin糊による骨接着の検討

田代　宏一　　田島　直也　　川野桂一郎
川越　正一　　*河野　　正
（ *宮崎医大　第2病理 ）

整形外科と災害外科　35（2）：　365～369,　1986

54　多発性recurrent calcibic periarthritisの一例

税所幸一郎　　木村　千仭　　武内　晴明　　永吉　康祐

整形外科と災害外科　35　（2）：　425～428,　1986

55　New Spinal Instrumentation and a Study of its Kinetics

Tajima　MD

J. Jpn Orthop. Ass　60：　951～958,　1986

56　Studies on the Evaluation of Joint Impairment in the Lower Extremities
－Examination by Multivariate Analysis－

H. Takeuchi

J. Jpn. Orthop. Ass　60（6）：　591～609,　1986

57　教室における最近5年間の脊髄脊椎腫瘍の検討

脇山　尚登　　田島　直也　　川野桂一郎　　三浦　広典
黒木　俊政　　木村　千仭

宮崎医会誌　10：　71～77,　1986

58　黄色ブドウ球菌による多臓器膿瘍を認めた肝硬変・糖尿病の1剖検例

*河野　清秀　　*宇野　久光　　*神尾　重則　　*岡山　昭彦
*横田　　勉　　*橘　　宣祥　　*津田　和矩　　*古賀　　孝
税所幸一郎　　*住吉　昭信
（ *宮崎医大　二内科、一病理）

宮崎医会誌　10：　102　～106,　1986

59　前・初期股関節症に対するPfannenosteotomie (nach Wagner)の経験

長鶴　義隆　　平川　俊一　　帖佐　悦男

Hip Joint, 12：　74～78,　1986

60　高令者の脊椎疾患 ── Osteoporosisと Spondylosisの関係について

武内　晴明　　田島　直也　　川野桂一郎　　川越　正一

木村　千仞

西日本脊椎研究会誌　１２：228～231,　1986

61　第６回姿勢シンポジウム印象記

田島　直也

姿勢研究　６（１）：　58～59,　1986

62　岡山大式MarkⅡの問題点　－特に膝蓋大腿関節面について－

税所幸一郎　　木村　千仞　　武内　晴明　　川越　正一

中村　誠司

九州リウマチ　５：113～115,　1986

63　Study of School Screening for Scoliosis

Naoya　Tajima

Department of Orthopaedic Surg.

J. Jpn. Scoliosis Soc 1 （1）：　92～97,　1986

64　多関節障害に対する外科的配慮

木村　千仞

関節外科　５：699～700,　1986

65　人工関節によらない関節形成術

木村　千仞

リウマチ　２６：290～298,　1986

66　卒後研修雑感

木村　千仞

日本医事新報（ジュニア版）２５２：　30～31,　1986

67　Quality of life(QOL)

木村　千仞

整形外科　３７（３）：　280，　1986

68　股関節症に対する臼蓋縁切除大腿骨骨切り術と臼蓋形成術併用の検討

平川　俊一　　長鶴　義隆　　帖佐　悦男　　三浦　広典

中日整災誌　２９：　1433～1435,　1986

69　マウスのコラーゲン誘導関節炎発症における抗Ⅱコラーゲン抗体の役割

*廣藤　卓雄　*垣本　毅一　*古賀　敏生　税所幸一郎
**住吉　昭信

（ *九州大学歯学部口腔生化学教室）
（**宮崎医科大学第一病理学教室）

福岡医誌　77（3）：　185～193,　1986

70　複数荷重関節障害における関節機能評価法について

武内　晴明　木村　千仭　税所幸一郎　脇山　尚登
松田　寿義

日関外誌,　6（1）：　67～73,　1987

71　ＲＡの骨粗鬆症関連因子について－重回帰分析による検討－

武内　晴明　木村　千仭　税所幸一郎　脇山　尚登
木下　泰行

九州リウマチ　6：　1～4,　1987

72　ムチランス型慢性関節リウマチにおける骨粗鬆化の検討

税所幸一郎　木村　千仭　武内　晴明　脇山　尚登
木下　泰行

九州リウマチ　4：　16～19,　1987

73　ＲＡにおけるOsteoporosisと手根骨面積との相関について

脇山　尚登　武内　晴明　木村　千仭　税所幸一郎
木下　泰行

九州リウマチ　6：　20～22,　1987

74　慢性関節リウマチにおける手根骨面積とcarpal height ratioの関係

税所幸一郎　木村　千仭　武内　晴明　脇山　尚登
松田　寿義

九州リウマチ　6：　122～125,　1987

75　腰椎後方手術用フレームの試作

（仮称　田島式　MarkⅡ）

田島　直也　川野桂一郎　出口　義宏　松本　宏一

南江堂　別冊整形外科　11：　164～167,　1987

76　寛骨臼骨切り術用ノミおよび固定用Kirschner鋼線

長鶴　義隆

別冊整形外科　11：　198～201,　1987

77　肘関節のResectional arthroplasty

木村　千仭　*石川浩一郎

（ *熊本大学整形外科）

日整会誌　61（8）：　554,　1987

78　環境と生体リズム

木村　千仭

整形・災害外科　30（4）：　355～356,　1987

79　腰椎疾患における Instability

－特に CT 所見より見た Rotational Instability について

松本　宏一　　田島　直也　　川野桂一郎　　田代　宏一

西日本脊椎研究会誌　13（1～2）：　100～105,　1987

80　アテトーゼ型脳性麻痺に合併した頚椎症の－手術例

川越　正一　　田島　直也　　川野桂一郎　　出口　義宏

整形外科と災害外科　35（3）：　784～788,　1987

81　腰椎不安定椎に対する Postero-lateral Spinal　Fusion について

－特にその制動効果について－

田代　宏一　　田島　直也　　川野桂一郎　　松本　宏一

整形外科と災害外科　35（3）：　896～900,　1987

82　脛骨粗面前内方移行術の手術適応

三浦　広典　　長鶴　義隆　　立山　洋司　　河野　雅行

押川紘一郎

整形外科と災害外科　36（1）：　32～37,　1987

83　球状臼蓋骨切り術（Wagner法）の手術適応と成績

長鶴　義隆　　平川　俊一　　三浦　広典　　帖佐　悦男

整形外科と災害外科，36（2）：　522～526,　1987

84　ＲＡ金治療におけるNitritoid反応の症例

脇山　尚登　　木村　千仭　　武内　晴明　　税所幸一郎

谷口　博信　　麻生　邦典

宮崎医会誌　11：　276～278,　1987

85　腰椎転移を初発症状として発見された細小細胞癌の１例

*北村　亨　*丸山　俊博　*林　克裕　*中村　東樹
*津田　和矩　脇山　尚登　*丸山理留敬　*河野　正
*竹内　三郎
（ *宮崎医大　二内科）
宮崎医会誌　11：　295～299,　1987

86　キモパパインの高感度酵素免疫測定法

川野桂一郎　田島　直也　木村　千仞　*橋田　誠一
*田中弘一郎　*石川　栄治
（ *宮崎医大　第一化学 ）
日整会誌　61（３）：　30,　1987

87　Approach to Evaluation of Impairment in Rheumatoid Arthritis
—A Study by Multiple Regression Analysis—

H. Takeuchi
J. Jpn. Orthop. Assoc.　61　：　31～37,　1987

88　組織反射スペクトル解析による動注動態の検討

田島　直也　木村　千仞　*永吉　康祐　**下津浦康祐
**佐田　道夫
（ *串間病院 ）
（**久留米大　第二内科）
整外と災外　36（２）：　390～393,　1987

89　リウマチの足

木村　千仞
日関外誌　6（２）：　171～172,　1987

90　Ｌ－141軟膏の腰痛症に対する臨床成績

*前山　巌　木村　千仞　田島　直也 ほか
（ *鳥取大　整形外科）
臨床成人病　17（11）：　155～161,　1987

91　関節液検査の意義と実際

木村　千仞　税所幸一郎
整形外科　38（２）：　253～260,　1987

92　脳卒中後片麻痺に合併した肩手症候群　－星状神経節ブロックの末梢循環動態－

田中　正一　*合志　勝子　*片伯部裕次郎　*緒方　甫

（ *産医大　リハ部　）

整外と災外　35（4）：　1476～1480,　1987

93　腰部背柱管狭窄症の下肢循環

帖佐　悦男　田島　直也　川野桂一郎　三股　恒夫

津曲　孝康

整形外科と災害外科　36（2）：　471～475,　1987

94　腰仙椎後側方固定術の検討

三股　恒夫　田島　直也　川野桂一郎　帖佐　悦男

津曲　孝康

整形外科と災害外科　36（2）：　504～507,　1987

95　慢性関節リウマチにおけるＣＣＡ使用の経験

税所幸一郎　木村　千仭　武内　晴明　脇山　尚登

谷口　博信

九州リウマチ　7：　65～68,　1987

96　側弯症に対する保存療法　－特に運動療法，装具療法の併用について－

出口　義宏　田島　直也　川野桂一郎　松本　宏一

田代　宏一　立山　洋司

宮崎医会誌　11（2）：　247～250,　1987

97　Manipulationにより憎悪したと思われる若年者腰部椎間板ヘルニアの１例

立山　洋司　田島　直也　川野桂一郎　松本　宏一

田代　宏一

宮崎医会誌　11（2）：　279～282,　1987

学会・研究会発表

日本整形外科学会

1　変性性腰部脊椎管狭窄症の病態

田島　直也　　川野桂一郎　　出口　義宏　　三浦　広典
*瀬良　敬祐
（ *長崎三菱病院　整形）
第57回日本整形外科学会（1984）札幌市

2　ＲＡにおける機能障害評価法への試み（第２報）－重回帰分析による－

武内　晴明　　木村　千仭　　脇山　尚登
第57回日本整形外科学会（1984）札幌市

3　動脈衝撃注射療法の検討

田島　直也　　木村　千仭　　川野桂一郎　　脇山　尚登
*永吉　康祐
（ *串間病院）
第57回日本整形外科学会（1984）札幌市

4　関節リウマチにおける骨塩分析（第２報）

木村　千仭　　武内　晴明　　戸田　　勝　　平川　俊一
第57回日本整形外科学会（1984）札幌市

5　腰痛の疫学的研究
　－労働者の腰部障害について－

*瀬良　敬祐　　*本多　重信　　*朝永　正剛　　*大里　裕治
田島　直也
（ *長崎三菱病院　整形）
第57回日本整形外科学会（1984）札幌市

6　New Spinal Instrumentation の試作と動力学的検討

田島　直也　　川野桂一郎　　*瀬良　敬祐
（ *長崎三菱病院　整形）
第58回日本整形外科学会（1985）岐阜市

7　ヒトの起立姿勢制御機構の解析（第三報）
　－体重心の揺らぎのパターン－

山口　一郎　　田島　直也　　*佐藤　謙助　**森貞　近見
（ *交通医学研究財団）
（**松山動作学研究所）
第58回日本整形外科学会（1985）岐阜市

8　関節リウマチにおける骨塩分析（第３報）

戸田　　勝　　木村　千仞　　木下　泰行　　帖佐　悦男
第58回日本整形外科学会（1985）岐阜市

9　Dynamic Analysis of Human Erect Postural Sways

I.Yamaguchi　N.Tajima　*K.Sato **C. Morisada
(*Reseach Foundation on Traffic・Medicine Tokyo)
(**Mastuya Kinesiology Reseach Foundation Mastuyama)
6 th Congress of International Society of Electro-
physiological Kinesiology (I. S. E. K)
(1985) Tokyo, Japan

10　ＲＡにおける機能障害評価法への試み（第３報）

武内　晴明　　木村　千仞　　税所幸一郎　　脇山　尚登
第59回日本整形外科学会（1986）東京都

11　キモパパインの高感度酵素免疫測定法（ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ 椎間板注入療法の基礎）

川野桂一郎　　田島　直也　　木村　千仞　　*橋田　誠一
*田中弘一郎　　*石川　栄治
（ *宮崎医大　第一生化学）
第１回日本整形外科学会基礎学術集会（1986）金沢市

12　組織反射スペクトル解析による腰部脊柱管狭窄症の下肢循環動態の検討

帖佐　悦男　　田島　直也　　川野桂一郎
第60回日本整形外科学会学術集会（1987）新潟市

13　肘関節のResectional Arthroplasty
（パネルディスカッション　Ⅰ－Ⅳ－P_2 －５）

木村　千仞　　*石川浩一郎
（ *熊本大学　整形外科）
第60回日本整形外科学会（1987）新潟市

14　組織反射スペクトル解析による腰部脊柱管狭窄症の硬膜循環動態の検討（第一報）

田島　直也　　川野桂一郎　　松本　宏一　　田代　宏一
帖佐　悦男　　立山　洋司
第２回日本整形外科学会基礎学術集会（1987）京都市

日本リウマチ学会

1　関節リウマチにおける微量元素の検討

木村　千仭　　脇山　尚登　　出口　義宏　　三浦　広典
木下　泰行
第28回日本リウマチ学会（1984）東京都

2　コラーゲン誘導関節炎と実験的間質性肺炎

税所幸一郎　　*住吉　昭信　　木村　千仭　　*古賀　敏生
*垣本　毅一
（ *宮崎医大　第一病理）
第29回日本リウマチ学会（1985）福岡市

3　慢性関節リウマチにおけるOsteoporosisに関与する因子の検討

武内　晴明　　木村　千仭　　税所幸一郎　　脇山　尚登
木下　泰行
第30回日本リウマチ学会（1986）横浜市

4　ＲＡにおける肘評価－Instabilityについて－

税所幸一郎　　木村　千仭　　武内　晴明　　脇山　尚登
木下　泰行　　谷口　博信
第31回日本リウマチ学会（1987）東京都

西日本整形災害外科学会

1　腰椎後方手術用フレームの検討

松本　宏一　　田島　直也　　出口　義宏　　川野桂一郎
森田　信二
第68回西日本整形災害外科学会（1984）熊本市

2　Lumbar radiculopathyの検討 ― 第２報：再手術例について

戸田　　勝　　田島　直也　　川野桂一郎　　福田　健二

帖佐　悦男

第68回西日本整形災害外科学会（1984）熊本市

3　慢性関節リウマチ患者と体力 ― 第２報

木村　千仭　　出口　義宏

第68回西日本整形災害外科学会（1984）熊本市

4　ＲＡ患者のＦ波の性状

木下　泰行　　河合　尚志　　木村　千仭　　中村　誠司

第68回西日本整形災害外科学会（1984）熊本市

5　慢性関節リウマチにおける内反拇趾変形

平川　俊一　　木村　千仭　　田代　宏一　　*永吉　康祐

（ *宮崎　串間病院）

第69回西日本整形災害外科学会（1985）久留米市

6　側弯症に対するHanging　Moire’について（第二報）

帖佐　悦男　　田島　直也　　川野桂一郎　　出口　義宏

福田　健二　　川越　正一

第69回西日本整形災害外科学会（1985）久留米市

7　腰椎手術例におけるＭＲＩ（Magnetic Resonance Imaging）の検討

川野桂一郎　　田島　直也　　田代　宏一　　*杜若　陽祐

**藤元　登四郎

（ *宮崎医大放射線科）

（**都城藤元病院）

第69回西日本整形災害外科学会（1985）久留米市

8　多発性recurrent calcific periarthritisの一例

税所幸一郎　　木村　千仭　　武内　晴明　　*永吉　康祐

（ *宮崎　串間病院）

第70回西日本整形災害外科学会（1985）大分市

9　側弯症に対するHanging ＥＭＧ

出口　義宏　　田島　直也　　川野桂一郎　　川越　正一

黒木　俊政

第70回西日本整形災害外科学会（1985）大分市

10　Fibrin糊による骨接着の検討

田代　宏一　　田島　直也　　川野桂一郎　　川越　正一
*河野　　正
（ *宮崎医大　第２病理）
第70回西日本整形災害外科学会（1985）大分市

11　腰椎不安定症に対する Postero－Lateral Spinal Fusion について

田代　宏一　　田島　直也　　川野桂一郎　　松本　宏一
第71回西日本整形災害外科学会（1986）福岡市

12　側弯症に対する Hanging効果について

田島　直也　　川野桂一郎　　出口　義宏　　松本　宏一
田代　宏一
第71回西日本整形災害外科学会（1986）福岡市

13　アテトーゼ型脳性麻痺に合併した頸椎症の一手術例

川越　正一　　田島　直也　　川野桂一郎　　出口　義宏
第71回西日本整形災害外科学会（1986）福岡市

14　脳卒中後片麻痺に合併した肩手症候群－星状神経節ブロックの末梢循環動態－

田中　正一　　*片伯部裕次郎 *合志　勝子　　*緒方　　甫
（ *産業医科大学　リハビリテーション科）
第71回西日本整形災害外科学会（1986）福岡市

15　球状臼蓋骨切り術（Wagner法）の手術適応と成績

長鶴　義隆　　平川　俊一　　三浦　広典　　帖佐　悦男
第72回西日本整形災害外科学会（1986）宇部市

16　組織反射スペクトル解析による動態の検討

田島　直也　　木村　千仭　　*永吉　康裕
（ *串間病院）
第72回西日本整形災害外科学会（1986）宇部市

17　脛骨粗面前内方移行術の手術適応

三浦　広典　　長鶴　義隆　　立山　洋司　　河野　雅行
押川紘一郎
第72回西日本整形災害外科学会（1986）宇部市

18　脊柱管狭窄症の下肢循環

帖佐　悦男　　田島　直也　　川野桂一郎　　三股　恒夫
津曲　孝康
第72回西日本整形災害外科学会（1986）宇部市

19　腰仙椎後側方固定術の検討

三股　恒夫　　田島　直也　　川野桂一郎　　帖佐　悦男
津曲　孝康
第72回西日本整形災害外科学会（1986）宇部市

20　陳旧性膝蓋靱帯断裂の１例

脇山　尚登　　武内　晴明　　木村　千仭　　税所幸一郎
谷口　博信
第73回西日本整形災害外科学会（1987）福岡市

21　外側膝蓋滑膜ひだ障害と思われる一症例

税所幸一郎　　木村　千仭　　武内　晴明　　谷口　博信
第72回西日本整形災害外科学会（1987）宇部市

22　キモパパインの注入後の血中動態について

川野桂一郎　　田島　直也　　松本　宏一　　田代　宏一
立山　洋司　　木村　千仭　　*橋田　誠一　　*田中弘一郎
*石川　栄治
（ *宮崎医大　第一生化）
第73回西日本整形災害外科学会（1987）福岡市

23　腰部脊柱管狭窄症に対する椎弓切除術と後側方固定術の併用法について

松本　宏一　　田島　直也　　川野桂一郎　　田代　宏一
立山　洋司
第73回西日本整形災害外科学会（1987）福岡市

24　骨粗鬆症に伴う腰椎圧迫骨折による下肢不全麻痺の３例

*前原　東洋　　*吉永　一春　　*福田　稔朗　　*前原　東作
田島　直也　　川野桂一郎
**森園　良幸
（ *前原病院＜小林市＞）
（**鹿児島大　整形）
第73回西日本整形災害外科学会（1987）福岡市

25　Epidermal nevus Syndrome の一例

帖佐　悦男　　田島　直也　　川野桂一郎　　松本　宏一
*菊地　一郎
（ *宮崎医大　皮膚科）
第73回西日本整形災害外科学会（1987）福岡市

26　ＭＲＩによる腰椎 blockについて

田代　宏一　　田島　直也　　川野桂一郎　　松本　宏一
田辺　龍樹
第74回西日本整形災害外科学会（1987）那覇市

27　難治性の脊椎カリエスの検討

松本　宏一　　田島　直也　　川野桂一郎　　田代　宏一
田辺　龍樹
第74回西日本整形災害外科学会（1987）那覇市

28　広範囲の脊髄・馬尾神経に存在したＥpendymoma の一例

川野桂一郎　　田島　直也　　山口　一郎　　田代　宏一
三股　恒夫　　津曲　孝康
第74回西日本整形災害外科学会（1987）那覇市

29　末梢動脈炎型悪性関節リウマチに於けるＰＧＥ点滴静注療法の経験

麻生　邦典　　桑原　　茂　　木村　千仭　　武内晴明
税所幸一郎　　脇山　尚登
第74回西日本整形災害外科学会（1987）那覇市

30　股関節症に対するＴ．Ｈ．Ｒ．の適応

三股　恒夫　　長鶴　義隆　　平川　俊一　　立山　洋司
帖佐　悦男　　鳥取部光司
第74回西日本整形災害外科学会（1987）那覇市

その他学会等

1　踵骨骨折におけるGraffin型ＰＴＢ装具の使用経験

*山本　恵央　　*矢島　弘嗣　　*山口　武史　　長鶴　義隆
*永岡　潤吉
（ *松原市立病院）
第62回中部日本整形外科災害外科学会（1984）

2　股関節症に対する臼蓋縁切除大腿骨々切り術と臼蓋形成術併用の検討

平川　俊一　　長鶴　義隆　　帖佐　悦男　　三浦　広典

第66回中部日本整形外科災害外科学会（1986）神戸市

3　股関節手術における自家血輸血の経験

三浦　広典　　長鶴　義隆　　立山　洋司　　平川　俊一

帖佐　悦男

第68回中部日本整形外科災害外科学会（1987）名古屋市

4　股関節固定術後のＡＤＬ

出口　義宏　　木村　千仭　　武内　晴明　　三浦　広典

第21回日本リハビリテーション医学会（1984）松山市

5　直立姿勢の動的高次制御活動

山口　一郎　　田島　直也　　*佐藤　謙助　**森貞　近見

（ *交通医学研究財団）

（**松山動作業研究所）

第21回日本リハビリテーション医学会（1984）松山市

6　Bone mineral content and rheumatoid arthritis

C. Kimura　　M. Toda　　S. Hirakawa

SICOT 84 (1984) London

7　A New Approach to Assessment of the Ankle Joint Function

－Application of Multiple Regressin Analysis－

H. Takeuchi　　H. Kimura

4th Deutsch-Japanische Tagung

(1984) Nurunberg（西ドイツ）

8　慢性関節リウマチ患者の体力

出口　義宏　　木村　千仭　　三浦　宏典　　福田　健二

第12回日本リウマチ・関節外科学会（1984）松本市

9　ヒト起立姿勢重心揺動の離散時系列の最適標本間隔について

山口　一郎　　田島　直也　　*森貞　近見　**佐藤　謙助

（ *松山動作研）

（**交通医学研・筑水会神経情報研）

第14回日本脳波筋電図学会（1984）北九州市

10　ＲＡにおける内反母趾（シンポ　ＲＡ足の治療）

木村　千仭　　武内　晴明　　平川　俊一　　*永吉　康祐

（ *串間病院）

第13回日本リウマチ・関節外科学会（1985）名古屋市

11　Dynamic Analysis of Human Erect Postural Sways

I.Yamaguchi　N.Tajima　*K.Sato **C. Morisada

(*Reseach Foundation on Traffic・Medicine Tokyo)

(**Mastuya Kinesiology Reseach Foundation Mastuyama)

6 th Congress of International Society of Electro-physiological Kinesiology (I. S. E. K)

(1985) Tokyo, Japan

12　Erfahrungen mit der Pfannenosteotomie fur einer Huftdysplastic und-subluxation mit. Praarthrotischen Deformitation

Y.Nagatsuru　S.Hirakawa　E.Chosa

5. Deutsch-Japanischen Orthopadentagung

(1986) Tokyo

13　慢性関節リウマチ患者の歩行と活動性

出口　義宏　　木村　千仭

第23回日本リハビリテーション医学会（1986）長崎市

14　Stiff skin syndrome

*菊池　一郎　*井上　勝平　*高崎　直哉　　税所幸一郎

（ *宮崎医大皮膚科）

第85回日本皮膚科学会総会（1986）京都市

15　リウマチの足

木村　千仭

第14回日本リウマチ・関節外科学会（1986）宮崎市

16　複数荷重関節障害における関節機能評価法について（主題）

武内　晴明　　木村　千仭　　税所幸一郎　　脇山　尚登

松田　寿義

第14回日本リウマチ・関節外科学会（1986）宮崎市

17　シンポジウムⅣ　ＲＡにおける脊椎病変
ＲＡにおける腰椎の病態
－特にＩnstabilityについての検討－
田島　直也
第14回日本リウマチ・関節外科学会（1986）宮崎市

18　「高令者の腰背痛について」
田島　直也
宮崎県南那珂外科・整形外科医会特別講演（1986）日南市

19　慢性関節リウマチに対するロキソニンの薬効評価
田島　直也
学術講演会（主催　三芝ＫＫ・後援　宮崎県医師会）
（1987）宮崎市

20　腰部椎間板ヘルニアに対するキモパパイン治療法について
田島　直也
長崎市臨床整形医会（第43回三金会）（1987）長崎市

21　日整会腰痛疾患治療成績判定基準による
塩酸エペリゾン（シオナール）の有効性安全性について
－宮崎医大整形他８施設による共同臨床研究－
田島　直也
第２回宮崎地区学術講演会（一般演題）（1987）宮崎市

22　Indikationen und Ergebnisse der spharischen Pfannenosteotomie
nach Wagner fur Dysplasiecoxarthrosen
Nagatsuru, Y.
第17回国際整形外科学会議(SICOT)（1987）Munchen

23　New Spinal Instrumentation(3 - S Instruments) a Preliminary report
Naoya Tajima　Kenichiro Kawano
XUII World Congress Soaete Instrumentation de
Chirurgide et de Traunatologie (1987) Munich

24　第17回国際整形外科学会ワークショップⅡ
ＲＡ脊椎の画像診断
ＲＡ腰椎に対するＭＲＩの検討
田島　直也　　田代　宏一　　税所幸一郎　　木村　千仭
*鈴木由紀子
（ *宮崎野崎病院放射線科）
第15回日本リウマチ・関節外科学会（1987）神戸市

25　ＲＡにおける肘関節機能評価の試み（第一報）
－可動域とＡＤＬについて－（ワークショップ）
脇山　尚登　　木村　千仭　　武内　晴明　　植村　貞仁
黒田　　宏　　久保紳一郎　　税所幸一郎
第15回日本リウマチ・関節外科学会（1987）神戸市

宮崎整形外科懇話会

1　拇指ＭＰ関節脱臼の一症例－整復困難な症例を観血的に整復
脇山　尚登　　酒井　　健
第９回宮崎整形外科懇話会（1984）宮崎市

2　整形外科手術に対するセルセーバー（cell　saver）の経験
森田　信二　　田島　直也　　川野桂一郎　　松本　宏一
第９回宮崎整形外科懇話会（1984）宮崎市

3　足関節外側側副靱帯損傷の治療経験
三浦　広典　　長鶴　義隆　　中村　誠司　　三股　恒夫
黒木　俊政　　木村　千仭
第９回宮崎整形外科懇話会（1984）宮崎市

4　Solitary bone cystの２例－開窓多穿刺法による治療経験－
田中　正一　　武内　晴明　　中村　誠司　　出口　義宏
第９回宮崎整形外科懇話会（1984）宮崎市

5　側弯症に対するHanging Moireの問題点について
帖佐　悦男　　福田　健二　　川野桂一郎　　田島　直也
第９回宮崎整形外科懇話会（1984）宮崎市

6　Microgeodic direaseの２症例

松本　宏一　　木村　千仭　　山口　一郎　　福田　健二

第９回宮崎整形外科懇話会（1984）宮崎市

7　腰椎水平骨折（Chance骨折）の１例

*内賀島英明　　脇山　尚登

（ *県立延岡病院）

第10回宮崎整形外科懇話会（1985）宮崎市

8　側弯症のHangig ＥＭＧ（Preliminary Report）

出口　義宏　　川越　正一　　川野桂一郎　　田島　直也

第10回宮崎整形外科懇話会（1985）宮崎市

9　Love法後の再手術例の検討

田代　宏一　　税所幸一郎　　川野桂一郎　　田島　直也

第10回宮崎整形外科懇話会（1985）宮崎市

10　股関節症に対する大腿骨骨切り術の適応

松本　宏一　　長鶴　義隆　　三浦　広典　　三股　恒夫

帖佐　悦男　　森田　信二　　黒木　俊政　　木村　千仭

第10回宮崎整形外科懇話会（1985）宮崎市

11　アテトーゼ型脳性麻痺に合併した頸椎症の一手術例

川越　正一　　出口　義宏　　田代　宏一　　川野桂一郎

田島　直也

第10回宮崎整形外科懇話会（1985）宮崎市

12　Peritendinitis calcareaと思われた３症例

平川　俊一　　木村　千仭　　山口　一郎　　黒木　俊政

河野　雅行　　中村　誠司

第10回宮崎整形外科懇話会（1985）宮崎市

13　活性型ビタミンDが奏効した腎性くる病の１例

大江　幸政　　大江　幸夫　　木村　千仭　　武内　晴明

大堂　庄三

第10回宮崎整形外科懇話会（1985）宮崎市

14　教室における最近５年間の脊椎・脊髄腫瘍の検討

脇山　尚登　　田島　直也　　川野桂一郎　　三浦　広典
黒木　俊政　　木村　千仭
第11回宮崎整形外科懇話会（1985）宮崎市

15　ＮＭＲ－ＣＴ画像診断による軟部腫瘍の経験

中村　誠司　　武内　晴明　　川越　正一　　木村　千仭
*成田　博実　　*立山　　直
（ *宮崎医大　皮膚科）
第11回宮崎整形外科懇話会（1985）宮崎市

16　肘頭に発生し、Osteoid osteoma と思われた一例

帖佐　悦男　　木村　千仭　　戸田　　勝　　平川　俊一
黒木　俊政　　山口　一郎
第11回宮崎整形外科懇話会（1985）宮崎市

17　先天性下腿偽関節に対する電気刺激療法の一例

山口　一郎　　木村　千仭　　平川　俊一　　出口　義宏
黒　木　俊　政
第11回宮崎整形外科懇話会（1985）宮崎市

18　腰部脊柱管狭窄症におけるサーモグラフィー

三浦　広典　　田島　直也　　川野桂一郎　　脇山　尚登
黒木　俊政
第11回宮崎整形外科懇話会（1985）宮崎市

19　腰部脊柱管狭窄症に対するＨ波について

黒木　俊政　　出口　義宏　　田島　直也　　川野桂一郎
三浦　広典　　脇山　尚登
第11回宮崎整形外科懇話会（1985）宮崎市

20　脛骨に発生したPeriosteal malignant hemangioendotheliomaと考えられた一例

税所幸一郎　　武内　晴明　　脇山　尚登　　木村　千仭
第12回宮崎整形外科懇話会（1986）宮崎市

21　骨折を伴わない遠位橈尺関節脱臼の一症例

森田　信二　　*木屋　博昭
（ *県立延岡病院）
第12回宮崎整形外科懇話会（1986）宮崎市

22　肩関節挙上運動再建を行った一例

戸田　勝　長鶴　義隆　帖佐　悦男　山口　一郎
*上塚　満
（ *江南病院）
第12回宮崎整形外科懇話会（1986）宮崎市

23　小児大腿骨頚部骨折の治療について

三浦　広典　長鶴　義隆　平川　俊一　出口　義隆
帖佐　悦男
第12回宮崎整形外科懇話会（1986）宮崎市

24　Cervical myelopathy に対する頚椎椎管拡大術

津曲　孝康　田島　直也　川野桂一郎　田代　宏一
松本　宏一
第13回宮崎整形外科懇話会（1987）宮崎市

25　リウマチ外科にける２～３の問題点（教育講演）

木村　千仭
第13回宮崎整形外科懇話会（1987）宮崎市

26　伸展拘縮時に対する関節授動症の１例

松田　寿義　武内　晴明　木村　千仭　税所幸一郎
脇山　尚登
第13回宮崎整形外科懇話会（1987）宮崎市

27　タナ障害により膝嵌頓状態をきたした１例

谷口　博信　武内　晴明　木村　千仭　税所幸一郎
脇山　尚登　麻生　邦典
第14回宮崎整形外科懇話会（1987）宮崎市

28　両膝離断性骨軟骨炎の治療経験

津曲　康弘　長鶴　義隆　三浦　広典
第14回宮崎整形外科懇話会（1987）宮崎市

29　ＲＡ金治療におけるNitritoid反応の１症例

脇山　尚登　木村　千仭　武内　晴明　税所幸一郎
谷口　博信　麻生　邦典
第14回宮崎整形外科懇話会（1987）宮崎市

30　Manipulationにより増悪したと思われる若年者腰部椎間板ヘルニアの一例

立山　洋司　　田島　直也　　川野桂一郎　　松本　宏一
田代　宏一
第14回宮崎整形外科懇話会（1987）宮崎市

31　骨粗鬆症に伴う腰椎圧迫骨折による不全麻痺の３例

*前原　東洋　　*吉永　一春　　*前原　東作　　田島　直也
川野桂一郎
（ *前原病院整形外科）
第14回宮崎整形外科懇話会（1987）宮崎市

32　側弯症に対する保存療法
　　－特に運動療法、装具療法の併用について－

出口　義宏　　田島　直也　　川野桂一郎　　松本　宏一
田代　宏一　　立山　洋司
第14回宮崎整形外科懇話会（1987）宮崎市

その他研究会

1　Charcot 様変化を伴った側弯変形

川野桂一郎　　田島　直也　　中村　誠司　　木村　千仭
第18回日本側弯症研究会（1984）札幌市

2　難治性慢性骨髄炎の治療経験

*押川紘一郎　　川野桂一郎　　田島　直也　　木村　千仭
（ *押川整形外科（宮崎））
第７回骨関節感染症研究会（1984）東京都

3　整形外科領域における術后カウザルギア様疼痛の対策

*押川紘一郎　**増田　　豊　　田島　直也
（ *押川整形外科（宮崎））
（**昭和大　麻酔科）
第18回ペインクリニック研究会（1984）大阪市

4　ＲＡの機能障害評価

武内　晴明
第25回九州リウマチ研究会（1984）北九州市

5　側弯症における Hangingモアレの検討

福田　健二　　田島　直也　　川野桂一郎　　三浦　広典
帖佐　悦男
第10回モアレ研究会（1984）東京都

6　頚椎症とその周辺疾患

田島　直也
宮崎市郡整形外科医会（1984）宮崎市

7　整形外科領域における評価法について

木村　千仭
開講10周年記念講演（1984）宮崎市

8　慢性リウマチ患者の体力

出口　義宏　　木村　千仭　　三浦　広典　　福田　健二
第23回九州リハ医懇（1984）熊本市

9　ＲＡにおける外科治療の問題

木村　千仭
山口大講演（1984）宇部市

10　特別講演「慢性関節リウマチの診断と治療における幾つかの問題点」

木村　千仭
第２回山口県リウマチ膠原病研究会（1984）宇部市

11　ＲＡにおける機能障害評価法のへ試み

木村　千仭　　武内　晴明
第13回薬検シンポ（1984）東京都

12　股関節遺残性亜脱臼に対する手術適応

黒木　俊政　　長鶴　義隆　　三浦　広典　　三股　恒夫
木村　千仭
第１回九州小児整形外科集談会（1985）福岡市

13　学童側弯症検診の検討

田島　直也　　川野桂一郎　　*瀬良　敬祐
（ *長崎三菱病院　整形）
第19回日本側弯症研究会（1985）名古屋市

14　脊椎・脊髄疾患におけるＭＲＩ（Magnetic Resonance Imaging）の検討

田島　直也　　川野桂一郎　　*杜若　陽祐　　**藤元登四郎

（ *宮崎医大放射線科）

（**都城藤元病院）

第14回日本脊椎外科研究会（1985）東京都

15　岡大式MrakⅡの問題点

税所幸一郎　　川越　正一　　武内　晴明　　木村　千仭

中村　誠司

第27回九州リウマチ研究会（1985）久留米市

16　腰痛の原因とその対策

田島　直也

第７回日本リウマチ友の会宮崎支部講演会（1985）宮崎市

17　高令者の腰背痛について

田島　直也

宮崎県西諸医師会講演会（1985）小林市

18　大学病院におけるリハビリテーション－小児リハビリテーション－

*中村真由美　　木村　千仭　　出口　義宏

（ *宮崎医大　リハ部）

第６回宮崎リハビリテーション研究会（1985）宮崎市

19　リウマチ外科における２、３の問題点

木村　千仭

第２鹿児島整形外科学術講演会（1985）鹿児島市

20　リウマチ外科における２、３の問題点

木村　千仭

第28回熊本整形外科医会（1985）熊本市

21　手の舟状骨にみられたガングリオンの一例

出口　義宏　　木村　千仭　　三股　恒夫　　川越　正一

第６回九州手の外科研究会（1985）福岡市

22　ＲＡにおける内反母趾

木村　千仭　　平川　俊一　　田代　宏一

第26回九州リウマチ研究会（1985）熊本市

23　大学病院におけるリハビリテーション－脳卒中片麻痺を中心に－

*中別府双十　　木村　千仭　　出口　義宏

（ *宮崎医大　リハ部）

第６回宮崎リハビリテーション研究会（1985）宮崎市

24　高齢者の脊椎疾患－OsteoporosisとSpondylosisの関係について

武内　晴明　　田島　直也　　川野桂一郎　　川越　正一

木村　千仭

第24回西日本脊椎研究会（1985）高知市

25　前・初期股関節症に対するPfannenosteotomie（nach Wagner）の経験

長鶴　義隆　　平川　俊一　　帖佐　悦男

第12回股関節研究会（1985）東京都

26　側弯症患者の起立姿勢揺動

山口　一郎　　田島　直也　　*佐藤　謙助　**森貞　近見

（ *交通医学研究財団）

（**松山動作学研究所）

第６回姿勢シンポジウム（1985）東京都

27　大腿骨頭辷り症の治療経験

帖佐　悦男　　長鶴　義隆　　平川　俊一　　木村　千仭

岡本　義久　　森田　信二　　押川紘一郎

第２回九州小児整形外科集談会（1986）福岡市

28　釣竿による電撃症の治療経験

田中　正一　　*吉村　　理

（ *九州労災病院リハビリテーション診断科）

第26回九州リハビリテーション医学懇話会（1986）

北九州市

29　慢性関節リウマチ患者の歩行時のエネルギー消費

出口　義宏　　木村　千仭

第26回九州リハビリテーション医学懇話会（1986）

北九州市

30　児童生徒の脊柱側弯症について

田島　直也

第33回長崎市学校保健協議会（1986）長崎市

31　ＲＡにおけるOsteoporosisと手根骨面積との相関について

脇山　尚登　　武内　晴明　　木村　千仭　　税所幸一郎

第28回九州リウマチ研究会（1986）宮崎市

32　ＲＡのOsteoporosis関連因子について－重回帰分析による検討－

武内　晴明　　木村　千仭　　税所幸一郎　　脇山　尚登

木下　泰行

第28回九州リウマチ研究会（1986）宮崎市

33　Mutilans typeＲＡにおける Osteoporosis

税所幸一郎　　武内　晴明　　木村　千仭　　脇山　尚登

木下　泰行

第28回九州リウマチ研究会（1986）宮崎市

34　膝蓋骨亜脱臼に対する治療－とくに反張時について－

税所幸一郎　　武内　晴明　　木村　千仭　　脇山　尚登

第12回九州膝関節研究会（1986）福岡市

35　側弯症における起立姿勢揺動の解析

山口　一郎　　田島　直也　　*佐藤　謙助　　**森貞　近見

（ *交通医学研究財団）

（**松山動作学研究所）

第20回日本側弯症研究会（1986）東京都

36　腰部椎間板障害における Instability

－特にＣＴ所見からみた Rotational Instability について－

松本　宏一　　田島　直也　　川野桂一郎　　田代　宏一

第25回西日本脊椎研究会（1986）飯塚市

37　腰部脊柱管狭窄症におけるコンタクトサーモグラフィー

三浦　広典　　田島　直也　　川野桂一郎　　黒木　俊政

第15回日本脊椎外科研究会（1986）東京都

38　リウマチ外科における２、３の問題点

木村　千仭

沖縄県整形外科医会（1986）那覇市

39　関節リウマチ治療における最近の話題

木村　千仭

西臼杵郡医師会学術講演会（1986）高千穂町

40　関節リウマチ治療における最近の話題－特に免疫調節剤を中心にして－

木村　千仭

都城市北諸県郡医師会学術講演会（1986）都城市

41　関節リウマチ治療における最近の話題

木村　千仭

延岡市医師会（1986）延岡市

42　リウマチの足

木村　千仭

岡山リドーラ学術講演会（1986）岡山市

43　老人切断者の諸問題

*日高　　隆　*中村真由美　　出口　義宏　　武内　晴明

木村　千仭

（ *宮崎医大　リハ部）

第７回宮崎リハビリテーション研究会（1986）宮崎市

44　慢性関節リウマチ患者の性的問題

田中　正一　　木村　千仭　　出口　義宏　*中村真由美

*日高　　隆

（ *宮崎医大　リハ部）

第27回九州リハビリテーション研究会（1986）宮崎市

45　ＲＡにおける手根骨面積とCarpal Height Ratioとの関係

税所幸一郎　　木村　千仭　　武内　晴明　　脇山　尚登

松田　寿義

第29回九州リウマチ研究会（1986）鹿児島市

46　小児期の骨盤骨切り術の検討

長鶴　義隆

第13回股関節研究会（1986）東京都

47　整形外科（上肢・末梢神経）診療にて遭遇したpainの症例

山口　一郎

第４回宮崎痛みの研究会（1986）宮崎市

48　減圧症（骨壊死）に対する骨シンチグラフィーの検討

*林　　克二　*吉村　　理　　田中　正一

（ *産医大　リハ科）

第26回九州リハビリテーション医学懇話会（1986）

北九州市

49　五十肩について

木村　千仭

都城市郡外科医会（1986）都城市

50　腰痛の臨床

－鑑別診断を中心として－

田島　直也

第46回しののめ医学会（宮崎市郡医師会）（1987）

宮崎市

51　人工関節によらない関節形成術

木村　千仭

第１回宮崎県臨床整形外科研修会（1987）宮崎市

52　リウマチの診断と治療

木村　千仭

特別講演（国立熊本病院）地区医療研修会（1987）

熊本市

53　熱傷：重症例の経験と考察

*中村真由美　*日高　　隆　　出口　義宏　　木村　千仭

（ *宮崎医大　リハ部）

第８回宮崎リハ研（1987）宮崎市

54　関節再建術　上肢

木村　千仭

第13回リウマチ中央教育研修会（1987）大阪府

55　リウマチ外科における最近の話題

木村　千仭

第68回福岡臨床整形外科医会研修会（1987）福岡市

56　キモパパインの高感度酵素免疫測定法

川野桂一郎　田島　直也　木村　千仞　*橋田　誠一
*田中弘一郎　*石川　栄治
（ *宮崎医大　第一生化学）
第５回ＩＤＴ研究会（1987）東京都

57　治療に難渋したと思われる遺残亜脱臼の治療経験

立山　洋司　長鶴　義隆　三浦　広典　帖佐　悦男
平川　俊一
第３回九州小児整形外科集談会（1987）福岡市

58　当教室におけるＣＣＡの経験

税所幸一郎　武内　晴明　木村　千仞　脇山　尚登
谷口　博信
第30回九州リウマチ研究会（1987）北九州市

59　腰部脊柱管狭窄症の術後遠隔調査

*牧野　佳朗　*菅　尚義　田島　直也　*井上　喜持
*河合　尚志
（ *健保諫早病院）
第36回長崎整形外科懇話会（1987）長崎市

60　馬尾障害におけるＮＭＲ－ＣＴの検討
　－特にミエログラム上完全ブロック例を中心として－

田代　宏一　田島　直也　川野桂一郎　松本　宏一
立山　洋司
第27回西日本脊椎研究会（1987）広島市

61　肺性肥厚性骨関節症の２例

脇山　尚登　木村　千仞　武内　晴明　植村　貞仁
久保紳一郎　黒田　宏　税所幸一郎
第31回九州リウマチ研究会（1987）佐賀市

62　10才代の股関節症に対する寛骨臼球状骨切り術の検討－Wagner法とTonnis法－

長鶴　義隆　平川　俊一
第14回股関節研究会（1987）高松市

63　ＭＲＩによる腰椎椎間板変性の評価
　－特にT_2値について－

松本　宏一　　田島　直也　　川野桂一郎　　田代　宏一
田辺　龍樹
第28回西日本脊椎研究会（1987）那覇市

64　Chymopapain椎間板内注入療法施行例の検討
　－特に画像診断を中心として－

田代　宏一　　田島　直也　　川野桂一郎　　松本　宏一
田辺　龍樹
第28回西日本脊椎研究会（1987）那覇市

65　習慣性膝蓋骨脱臼に対するmedial plication時の小工夫

武内　晴明　　木村　千仭　　脇山　尚登　　黒田　　宏
税所幸一郎
第23回膝関節研究会（1987）東京都

外来・入院患者の推移

期　　日	外来患者		入院患者	
	初　診	延患者数	延患者数	1日平均
昭和52年10月～ 昭和53年3月 （5ケ月）	人 693	人 1,963	人 2,775	人 19.5
昭和53年4月1日～ 昭和54年3月31日	1,665	6,472	7,595	20.8
昭和54年4月1日～ 昭和55年3月31日	2,015	7,308	10,174	33.4
昭和55年4月1日～ 昭和56年3月31日	2,172	7,963	13,484	36.9
昭和56年4月1日～ 昭和57年3月31日	1,900	8,605	13,156	36.0
昭和57年4月1日～ 昭和58年3月31日	2,244	10,585	12,902	35.3
昭和58年4月1日～ 昭和59年3月31日	2,193	11,867	12,685	34.8
昭和59年4月1日～ 昭和60年3月31日	2,067	12,721	13,349	36.6
昭和60年4月1日～ 昭和61年3月31日	1,946	12,235	12,950	35.5
昭和61年4月1日～ 昭和62年3月31日	2,366	14,133	12,873	35.3
昭和62年4月1日～ 昭和62年11月30日	1,586	9,508	8,871	36.4

手　術　件　数

年　度	件　　数	病院全体の件数
52年	10	72
53年	102	1,218
54年	138	1,937
55年	196	2,196
56年	184	2,355
57年	227	2,458
58年	239	2,404
59年	312	2,421
60年	290	2,453
61年	357	2,518
62年	390	2,819

編 集 後 記

宮崎医大整形外科同門会誌第一号がやっと創刊のはこびとなりました。宮崎医大の開学が昭和49年（同年整形外科開講）であるから、13年目にして、まさに遅ればせながら第一号という事であります。この間、第14回日本リウマチ・関節外科学会、第62回西日本整形災害外科学会を木村教授が担当され、同門会々員も51名となり、いよいよ創設期から充実期に入りました。幸い本学卒業生の入局も少しずつ増え、５年前に発足したグループ制もどうにか地についてきた感じであり、又関連病院も少しずつ増えてきています。

今回は創刊号という事で皆も気負いがあり、又写真等を集めるのも期間がたちすぎ、探すのに苦労もありました。今後はそれぞれの行事等の写真、記録等を残し定期刊行物としていきたいものです。

最後に御多忙中特別寄稿を頂いた玉井達二前学長をはじめ御協力頂いた先生方に厚く御礼申し上げます。又業績は前回開講10周年業績目録を出しましたから、今回はＳ59年６月からＳ62年12月迄の分としました。次回の同門会誌がさらに充実したものになる事を念願して編集後記とします。

尚、編集上、脱落等万全を期しましたが、不備の点は御容赦をお願いします。

（田島記）

63. 1. 6

編集員　田 島 直 也
押 川 紘一郎
戸 田 勝
平 川 俊 一

宮崎医大整形外科学教室

同　門　会　誌

発行日　昭和63年1月20日
発行者　宮崎医科大学整形外科学教室同門会
編集責任者　田島直也
印刷者　㈲黒田謄写堂